



みたかまちづくりディスカッション2006 実施報告書

2006年12月

三鷹青年会議所  
みたかまちづくりディスカッション2006実行委員会

会議の目的は

結論を出すことです。

何かを決めて終えるようにし、

後戻りしないでください。

出てきたアイデアが

実現可能かどうかは

考えないでください。

## みたかまちづくりディスカッション2006 実施報告書

ひたすらアイデアを

出してください。

相手のアイデアを

否定しないで

ほめてください。

グループのみなさんが

発言できるように

ご配慮ください。

人の意見を聞いて

自分の意見を変えても

良いです。

～子どもの安全安心をテーマに～



みたかまちづくりディスカッション2006  
実施報告書



2006年12月

三鷹青年会議所

みたかまちづくりディスカッション2006実行委員会

## 三鷹青年会議所とは

青年会議所(JC)とは積極的な変化の創造を目的に「明るい豊かな社会」の実現を目指す、20歳から40歳までの次世代の担い手、指導者たらんとする青年の団体です。

会員は人種、国籍、性別、職業、宗教の別なく、個人の自由な意思により、その居住する各都市の青年会議所に入会できます。

50年余りの歴史をもつ日本の青年会議所運動は、現在720の地域に約40,000人の会員がおり、全国的運営の総合調整機関として社団法人日本青年会議所が東京都千代田区平河町にあります。

全世界に及ぶこの青年運動の中核は国際青年会議所(JCI)で、110余か国に及び、約30万人の会員が国際的連携を持って活動しています。そして日本青年会議所の運動目標は“社会と人間の開発”です。

その具体的運動として三鷹青年会議所は三鷹市民社会の一員として、市民の共感を求め、社会開発計画による日常運動を展開し「自由」を基盤とした民主的集団指導力の開発を50人の会員で推し進めています。日本の独立と民主主義を守り、自由経済体制の確立による豊かな社会を創り出すために、市民運動の先頭に立って進む団体が青年会議所です。

### 【活動内容】

会員研修事業

みたかわんぱくサッカーフェスティバルの主催

三鷹国際交流フェスティバルの共催

市内小中学校の総合的な学習の支援とプログラムの提供

### 【連絡先】

三鷹青年会議所

〒181-0013

東京都三鷹市下連雀 3-37-15

三鷹商工会館内

Tel : 0422-46-4199

Fax : 0422-47-4804

ホームページ : <http://www1.parkcity.ne.jp/mitakajc/>

メールアドレス : [mitakajc@parkcity.ne.jp](mailto:mitakajc@parkcity.ne.jp)

## ごあいさつ

今回の「みたかまちづくりディスカッション2006」の開催にあたっては、多くの市民の皆様にご参加いただき、誠にありがとうございました。

大変、活気のある話し合いから貴重なご意見を沢山いただきました。パートナーシップ協定にもとづき、本報告書を市民提案として、責任をもって三鷹市に提出させていただきます。

また、みたかまちづくりディスカッション2006実行委員会の皆様には、ボランティア運営にも関わらず、実施そして集大成である本報告書をまとめていただき、心から感謝申し上げます。

いま、地方分権が進む中、独自性をもった魅力あるまちにするためには、まちづくりに対する市民意識の向上が不可欠であると考えています。その実現のためには、自分たちのまちの課題は自分たちで解決していく、という地方自治のあるべき姿に立ち返り、まちづくりに参加する機会を拡大していくことが重要であり、この「みたかまちづくりディスカッション2006」は、まちづくりに参加するための1つの手法として大変効果的であると考えております。

今回の実施後、多くの自治体や各地青年会議所、市民団体などからお問い合わせをいただいております。今後はいろいろなテーマでこの取り組みが実施され、市民自治による協働のまちづくりがますます推進されることを希望しています。

私たちの提案に応じていただきました三鷹市、そして運営に関わっていただきました市民の皆様、また当日の話し合いを承諾いただきました市民の皆様に御礼申し上げますとともに、この取り組みを今後も継続的かつ発展的に実施することを三鷹市にご検討いただきますようお願い申し上げます。

2006年12月

三鷹青年会議所  
理事長 埴村 貴志



## はじめに

この報告書は三鷹市と三鷹青年会議所が自治基本条例施行後の第1号となるパートナーシップ協定を結び、「子どもの安全安心」をテーマに実施した「みたかまちづくりディスカッション2006」の結果を集計・分析し、市民提案として三鷹市に提出すること、および今後の展開を考慮しマニュアル化することを目的にまとめたものです。

運営は公平・公正な運営を担保するために三鷹市、三鷹青年会議所、そして市民の計22人による実行委員会を設置し実施いたしました。

この「みたかまちづくりディスカッション2006」は、ドイツで行われているプラークスツェレを参考に、実行委員会で約6か月間、30回の会議を経て作り上げ、今まで市民参加の機会が無かった市民の皆さんにまちづくりに参加していただくという取り組みでした。

市政に声なき声をくみ上げ、また市民参加意識向上による参加拡大が期待できるこの取り組みは多くの市民の皆様より反響をいただきました。18歳以上の市民を対象に完全無作為抽出により1,000人に参加依頼書を送付したのに対し、実行委員会が考えていた当初の想定を上回る87人から参加同意があり、抽選により選ばれた52人にご参加いただきました。

2006年8月26日、27日の2日間で三鷹市市民協働センターにて実施され、参加者が10グループ(1グループ5～6人)に別れて、4つの小テーマの話し合いに対して熱心な討議が行われ、多くの意見や考えを聞くことができました。そして、市民の皆さんは決して市政に無関心なのではなく、機会があれば市民参加をしたいと考えていることがわかりました。

2006年9月27日に中間報告会を開催し、話し合いの結果に対する方向性を確認していただき、本報告書をまとめるに至りました。

この報告書を市民提案として三鷹市に提出するにあたり、この内容を三鷹市の安全安心のまちづくりにおける施策に反映することを参加市民に代わりましてお願いいたします。

市民自治による協働のまちづくりという目指すべき社会に向かって、今後この「まちづくりディスカッション」が、公平・公正な運営のもとに発展し、継続的に行われることを切に願うとともに、この報告書を参考にいただき、各地で開催されることによって多くの実証結果からこの手法がブラッシュアップされ、三鷹市そして日本各地で多様な課題やテーマで実施されることを期待しています。

2006年12月

みたかまちづくりディスカッション2006実行委員会  
実行委員長 吉田 純夫



## 目 次

ごあいさつ	
はじめに	
概要 .....	1
第1章 総論 .....	5
I なぜ今まちづくりディスカッションなのか .....	5
II プラースクツェレとは .....	6
III 三鷹市における市民参加・協働のまちづくりの歴史 .....	7
IV まちづくりディスカッションとは .....	8
第2章 話し合いの結果と市民からの提案 .....	13
I 市民からの提案 .....	13
II 話し合いの分析の方法 .....	15
III テーマごとの話し合いの結果 .....	15
第3章 まちづくりディスカッションの検証と評価 .....	25
I まちづくりディスカッションの有効性 .....	25
II まちづくりディスカッションの手法の特徴 .....	27
III 開催準備から報告書提出までの記録 .....	30
IV 検証と評価 .....	32
第4章 展望 .....	44
I まちづくりディスカッションの展望 .....	44
II 今後の取り組みに関する情報提供 .....	45
参考文献 .....	47
編集後記に代えて～スタッフからのメッセージ～ .....	48
資料 .....	51





# 概要

## 1. 本報告書の位置づけ

本報告書は、三鷹青年会議所と三鷹市が締結した「みたかまちづくりディスカッション2006」の実施に関する協定書(パートナーシップ協定)にもとづき、三鷹青年会議所と三鷹市が協働で「みたかまちづくりディスカッション2006」(以下、まちづくりディスカッションという。)を実施し、そこで行われた話し合いの結果を市民提案として三鷹市に施策への反映を求めるとともに、まちづくりディスカッションという新たな市民参加の取り組みについて検証・評価したものである。

本報告書は、その内容を三鷹青年会議所のメンバー、市民および三鷹市職員による「みたかまちづくりディスカッション2006実行委員会」(以下、実行委員会という。)において検討し、上記協定書にもとづき三鷹青年会議所が三鷹市に提出するものである。

## 2. パートナーシップ協定の締結

まちづくりディスカッションは、2006年5月に締結されたパートナーシップ協定にもとづき実施された。パートナーシップ協定では、まちづくりディスカッションの実施およびその手法の効果の検証・評価に関し、三鷹青年会議所と三鷹市との間の関係や役割分担、相互協力の内容などを定めることとし、また、市民を含めた実行委員会によりまちづくりディスカッションの企画・運営を行うこととした。

## 3. まちづくりディスカッションの目的

三鷹市では、市民参加の手法として、住民協議会による「コミュニティ・カルテ」や「みたか市民プラン21会議」など、数々の取り組みを行ってきたが、今回新たにドイツの市民参加の手法である「プラーヌクスツェレ」を参考にしてまちづくりディスカッションの実施に挑戦した。

その目的は、これまで行政に声を届けるきっかけの少なかったサイレント・マジョリティーと呼ばれる一般の市民の市政への参加を促し、その声を行政に届け、まちづくりに活かすとともに、この新しい市民参加について検証・評価することである。

## 4. まちづくりディスカッションの実施

まちづくりディスカッションは、2006年8月26日(土)・27日(日)の2日間にわたり三鷹市市民協働センターにおいて開催された。

参加者は、無作為抽出により18歳以上の市民1,000人に参加を呼びかける依頼書を送付し、依頼を承諾した市民87人を対象に抽選を行い60人とした。なお、参加者には、謝礼を支払うこととした。

まちづくりディスカッションの当日は、52人(8月27日は51人)の参加者を得て、「安全安心のまちづくり～子どもの安全安心～」をメインテーマとし、「子どもにとって危険や不安を感じるのは、どこで、どんな時だと思いますか?」「地域安全マップの作り方・使い方のアイデアを出してください。」「地域の子どもを見る目をふやすためのアイデアを出してください。」「まとめの提案:子どもを犯罪から守るために、こんなことを始めたらどうでしょう。」の4つの個別テーマでそれぞれ話し合いを行った。話し合いにあたっては、10グループ(1グループ5～6人)に別れて、話し合いごとにメンバーを入れ替えることとした。毎回、グループごとに3つ以内に意見をまとめ、意見の傾向を見るため、その意見に対して、参加者が投票を行うこととした。

## 5. 市民提案の内容(詳細は第2章参照)

まちづくりディスカッションの話し合いの結果である市民からの提案は、次のとおりである。

### (1) 地域社会・地域コミュニティの重要性

子どもの安全安心を確保するためには、地域社会・地域コミュニティの役割が重要であると認識されている。その一方で、地域の活動に参加するには、「きっかけ」づくりが重要である。また、地域の活動へ参加を促す方法として、参加しやすい工夫(日常の生活のついでにできるような参加の方法を検討するなど)も求められている。

### (2) 継続的・安定的に地域活動に参加できる仕組みづくり

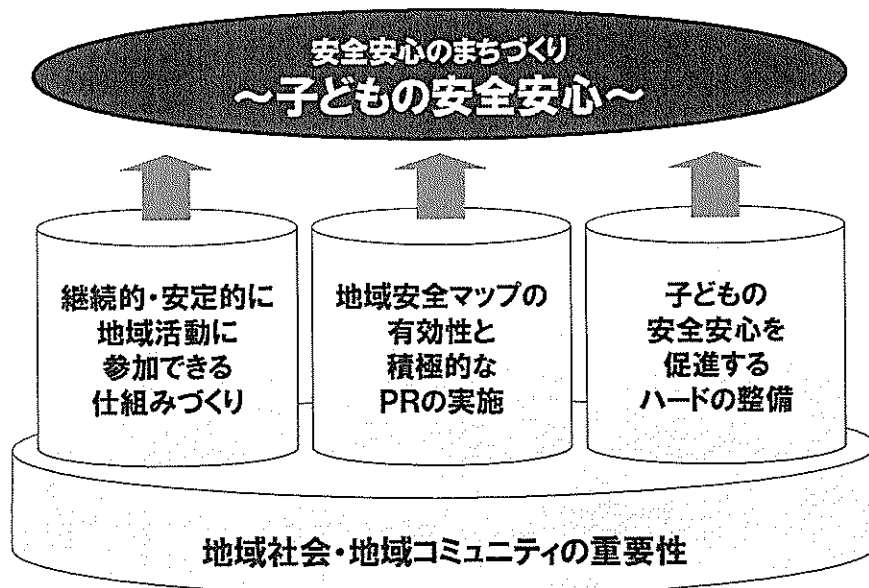
子どもの安全安心のための活動を含め、さまざまな地域のための活動に継続的・安定的に参加するためには、参加者の研修やリーダーの養成、あるいは気軽に参加できる仕組みの検討が必要である。また、例えば、有償ボランティアについて検討するなど、個人の負担が過大にならないような仕組みづくりも必要である。

### (3) 地域安全マップの有効性と積極的なPRの実施

地域安全マップについては、その有効性を認めながらも、その存在が十分に市民に知られず、十分活用されていない面も否めない。したがって、子どもの安全安心を確保する観点から、学校に通わせている子どもを持つ親だけではなく、地域全体に周知を図るなど、三鷹市は、あらゆる手段を活用して、市民にその存在をPRする必要がある。

### (4) 子どもの安全安心を促進するハードの整備

今回の話し合いの結果から、道路や公園などハード面での整備・管理に関するアイデアも多数寄せられ、また、子どもの居場所の整備に関する意見も寄せられた。このことから、三鷹市の長期的な取り組みとして、従来の防災や交通安全の確保などに加え、犯罪に巻き込まれにくい、あるいは犯罪を引き起こしにくいまちづくりの視点を含め、ハード面での総合的なまちづくりを推進する必要がある。



## 6. まちづくりディスカッションの有効性(詳細は第3章参照)

今回のまちづくりディスカッションの効果と手法について検証と評価を行った結果、この手法の有効性が明らかになった。

### (1) 効果のまとめ

検証・評価の結果、次のとおり、まちづくりディスカッションの効果が明らかになった。さらに、参加を承諾し、あるいは都合がよければ参加したいという市民が実行委員会の予想を超えて多数あり、三鷹市においては、この手法を継続して実施できる条件を備えていることが証明された。

#### ア 質の高い提案

参加者の質の高い話し合いにより、話し合いの結果である提案の内容が、市民や地域で実施すべき課題と行政で実施すべき課題とが区別されており、それぞれ実現可能性が高いものとなっている。このことから、三鷹市の施策に反映すべき内容を備えた質の高い提案が期待できる。

#### イ 参加者の高い満足度

参加者アンケートに示されるように、まちづくりディスカッションの参加者の76%が大変満足または満足と回答しており、また、82%が再度参加してもよいと回答している。このことから、今後この取り組みを継続することが期待できる。

#### ウ 参加意識の高まり

参加者アンケートにおいて、「市民としての意識を持つきっかけとなった」「市民が話し合う場をもっと設定すべき」などの意見が多数寄せられた。このことから、まちづくりディスカッションの取り組みにより、自分たちのまちは自分たちがつくるという参加意識が高まったといえる。

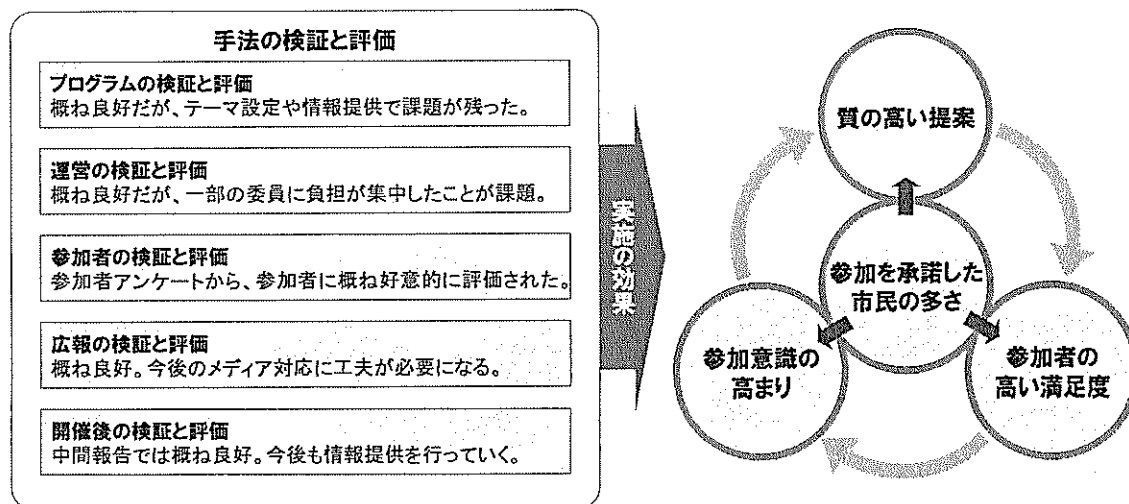
#### エ 参加を承諾した市民の多さ

無作為抽出により1,000通参加依頼書を送付し、87人という多数の市民から参加の承諾を得たため、三鷹市においては、まちづくりディスカッションによる市民参加の手法の実施が今後も可能であるといえる。

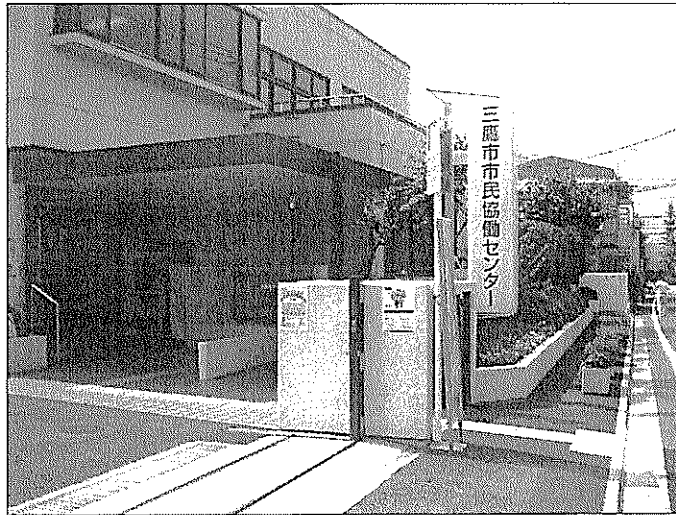
### (2) 手法のまとめ

「三鷹版」プラumnクスツェレであるまちづくりディスカッションの実施にあたり、様々な工夫を行った。その結果、プログラム設計、パートナーシップ協定、運営組織、スタッフ、無作為抽出による参加者募集や参加者への謝礼、広報、中間報告会など、あらゆる面において、概ね評価できるものとなった。

ただし、一部の実行委員に負担が偏ったことや、話し合いのテーマの設定方法および情報提供の内容について、改善すべき課題が残った。



### 開催会場の三鷹市市民協働センター



### 当日の入口の様子



### 協働センター内に設置された事務局



# 第1章 総論

この章では、三鷹市でまちづくりディスカッションを実施した経緯と話し合いの概要を述べる。

## 1. なぜ今まちづくりディスカッションなのか

三鷹市では、早くから市民参加によるまちづくりが行われてきた。2006年4月1日には三鷹市自治基本条例が施行され、市民参加によるまちづくりのさらなる拡大が期待される。

一方、国では地方分権を進めており、また「道州制」の導入などが協議されるなど、大きく地方分権の動きがクローズアップされてきている。

これら地方自治をめぐる動きに対して、基礎自治体である市町村は、限られた財源で多くの課題に取り組まなければならないため、厳しい行政運営を迫られている。このような状況である今こそ、地方自治体の独創的なあり方が問われ、独自財源の確保、地域に適した自治の手法の構築が最重要課題となっている。また、行政サービスの受け手であった住民の意識や行動も問われてくる。

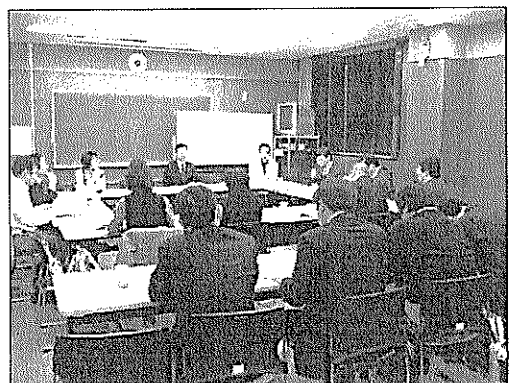
現在、地方自治体は住民の声を施策に活かすため、市民アンケートやヒヤリング、政策公募、タウンミーティングや市民会議などに取り組んでいる。しかし、これらに参加する住民は、それぞれの分野に興味をもち、時間的にも比較的余裕のある限られた住民が多いことが想定され、限られた参加者により意見が集約されるのではないかと懸念もある。

これは三鷹市も例外ではなく、市民自治による協働のまちづくりをさらに推進していくため、市民参加の新たな手法に取り組む必要がある。

このような状況の中、2005年7月16日(土)・17日(日)に社団法人東京青年会議所千代田区委員会が普段会社勤めや通学をし、あるいは家事や子育てを行っている普通の生活をする区民の声を行政の施策に反映させるとともに、新たな市民参加の可能性を検証するため「市民討議会」を開催した。この「市民討議会」は、18歳以上の区民から無作為抽出により参加者を募り、東京青年会議所千代田区委員会が選定したテーマについて話し合いを行うというもので、1日目に3回、小グループ(5人ずつで3グループ、1回ごとにメンバーを入れ替える)で話し合いを行い、2日目に全体のまとめを行った。

この「市民討議会」は、ドイツを中心にヨーロッパで広く実施されている市民参加の手法「プラーヌクストツェレ」(次ページ参照)を参考に実施されており、今後、市民参加の拡大が急務と考える私たちにとって大変魅力を感じる手法であった。

この「市民討議会」には、三鷹の市民も参画しており、三鷹市において同様の取り組みを実施するため、9月には三鷹青年会議所、市民団体、市民により検討を始め、2006年2月に三鷹青年会議所、市民および三鷹市により実行委員会設立検討委員会が発足した。



●実行委員会の様子

## II. プラークスツェレとは

プラークスツェレ(Planungszelle:計画細胞)は、ペーター・C・ディーネル(Peter C. Dienel)ドイツ・ヴパタル大学名誉教授により1970年代に考案された市民参加の手法である。

ドイツでは、1990年のドイツ統一後、地方公共団体において住民投票制度が導入されていったことに伴い、直接民主主義に対する認識が高まった。このような潮流の中で、市民参加の手法の1つとしてプラークスツェレが注目された。現在では、スペインやオランダなどでも取り組みがなされている。

プラークスツェレは、行政機関がプラークスツェレで検討する内容を示して、大学等の公平・中立的な実施機関に委託して行う。受託者である実施機関において、プログラムを作成し、プラークスツェレを実施する。参加者は、地域から無作為に選ばれた市民から募り、実施プログラムに沿って少人数で話し合いを行う。そこで出された意見を集約して広報を行うとともに、行政機関に提言し、市民の声をまちづくりに反映させる手法である。なお、参加者には、仕事として取り組んでもらうため、報酬を支払う。

この手法の最大の特徴は、今までの公募による市民会議と異なり、基本的に18歳以上(最近では16歳以上の場合もある)の市民から「無作為抽出」により参加者を募ることである。このため、参加者は、限られた特定の人々の集団や専門家ではなく、ほとんどの場合、テーマに関し直接の当事者ではない一般の市民である。また、男女比率、年齢や職業などの構成が、その地域の構成と同様の傾向を示すことになり、その意味において、参加者はその地域の代表者であるといえる。

プラークスツェレにおいては、話し合いの数は4日間で16コマとし、参加者はコマごとに設定される個々のテーマに沿って、公平・中立な立場、または賛成、反対両方の立場による専門家等からの情報提供を受け、その後1グループ5人(通常5グループ25人で行う)で、参加者だけで話し合いを行う(情報提供を含め1コマ90分)とされる。話し合いは、特定の参加者の意見だけが反映されることのないよう、コマごとにメンバーを入れ替えて行う。

このような少人数による話し合いを、コマごとにメンバーを入れ替えながら行うことで、他の参加者の意見を十分聞き、お互いの体験や視点を尊重しながら、合意形成を行うことが可能になる。

このようにして得られたグループの意見に対して、全員で投票を行うが、話し合いと投票を経て得られた結論は、利権誘導や専門家の意見に偏った形にはならないものとなる。

他の市民参加の手法に比べてコストがかかる点と開催の準備や最終報告に時間がかかる点に問題があるものの、サイレント・マジョリティーと呼ばれる一般の市民の声なき声を抽出できる方法として、きわめて有効であると評価できる。また、プラークスツェレの参加者が、開催後に地域社会に対する参画意識が非常に高まる点も評価できる。

### プラークスツェレの特徴

1. 話し合いへの参加者を無作為抽出で選ぶ。
2. 参加者に謝礼を支払う。
3. 1グループ5人(通常5グループ25人で行う)に分けて参加者だけで話し合いを行い、全体で投票を行う。  
(1日4コマ、4日間で16コマ)
4. 各話し合いの前に現状や課題などの情報提供を行う。

### III. 三鷹市における市民参加・協働のまちづくりの歴史

三鷹市では、1960年代より市民参加による計画行政が行われていた。1970年代初頭には基本構想策定のための「まちづくり市民の会」が発足し、また、住区ごとに住民協議会が設置され、活動拠点であるコミュニティ・センターの運営管理が住民に任されるなど、後に「三鷹方式」として全国に広がる仕組みを確立した。住民協議会は、その後20年をかけて全市を網羅する7つの住区に設置され、その後のコミュニティ・カルテやワークショップなど住民参加によるまちづくりにつながった。

1999年10月には、基本構想・第3次基本計画の策定に向け、「白紙からの市民参加」による提言を行うため、「みたか市民プラン21会議」が発足した。「みたか市民プラン21会議」は、三鷹市とパートナーシップ協定を結び、三鷹市との協働により、市民の意見を基本構想・基本計画に反映させるという画期的なものであった。以下市民参加・協働の取り組みについて振り返る。

※三鷹市の市民参加と協働のあゆみ(年表)は141～147ページ参照

#### 1. 住民協議会

住民の自治組織である住民協議会は、市内7つの住区ごとに置かれている。住民協議会は、それぞれの住区に設置されたコミュニティ・センターを管理するとともに、コミュニティまつりやコミュニティ運動会、子どもシルバーまつりなどさまざまな事業を行っている。また、近年では地域ボランティア活動と一体となったリハビリテーション事業に取り組むなど、三鷹のまちづくりに重要な役割を担っている。



●コミュニティまつり(大沢コミュニティ・センター)

#### 2. コミュニティ・カルテ

1980年度、1984年度、1988年度の3回にわたって、住区ごとに住民自らがまちを点検し、問題点を明らかにする「コミュニティ・カルテ」(まちづくり診断)を作成した。コミュニティ・カルテによる提言を受けた三鷹市は、1989年に「まちづくりプラン」を作成、計画に反映しまちづくりの礎とした。

#### 3. 丸池復活プランづくり(ワークショップ)

かつて仙川の水源の1つだった丸池は、市街化とともに埋め立てられたが、「まちづくりプラン」において、この丸池の復活が決定した。丸池の復活にあたっては、1997年2月からワークショップ(地域の住民延べ1,000人が参加)を行い、丸池を中心とする公園づくりのプランをつくり、同年11月三鷹市に提言した。現在丸池は復活、ワークショップに参加したメンバーにより2000年10月に「丸池わくわく村」が発足し、田植え、清掃、お祭りなどを行っている。

#### 4. みたか市民プラン21会議

三鷹市のまちづくりにおいて、最も重要な計画である基本構想と第3次基本計画の策定に向け、三鷹市が素案を策定する前の段階からの市民参加(白紙からの市民参加)を行うため、375人の公募市民が集まり、延べ773回もの話し合いを重ね、史上類を見ない規模の市民参加となった(1999年10月～2001年11月)。



●みたか市民プラン21会議

みたか市民プラン21会議は、三鷹市初の市民と行政の「パートナーシップ協定」を締結し、協働という市民参加の新しい形を提示することになった。

## IV. まちづくりディスカッションとは

### 1. 基本コンセプト

IIIで述べたように、これまで三鷹市では、よりよいまちづくりを目指して、さまざまな市民参加や協働の取り組みを行ってきた。これらの市民参加や協働の取り組みは、市民の積極的な参加があったからこそ、成し遂げられたものである。しかし、市民も三鷹市もこれまでの市民参加や協働の取り組みに満足することなく、三鷹市民の幅広い意見を取り入れ、まちづくりのレベルアップを図る必要を感じていた。そこで、三鷹青年会議所と三鷹市が協働して、これまで行政に声を届けるきっかけの少なかった市民(サイレント・マジョリティー)に参加を呼びかけ、話し合いを行い、参加者から出された意見を市民からの提案として今後の行政施策に反映させるとともに、この新たな市民参加の手法の効果の検証と評価を行うことを目的に、まちづくりディスカッションを実施することとした。

2006年3月10日(金)には、まちづくりディスカッションの実施に先立ち、三鷹青年会議所主催により、「みたかまちづくりディスカッション」公開フォーラム(講演:別府大学教授 篠藤明德氏)を開催した。

2006年5月18日(木)には、三鷹青年会議所と三鷹市との間で、「みたかまちづくりディスカッション2006」の実施に関する協定書(パートナーシップ協定)を締結した。パートナーシップ協定では、まちづくりディスカッションの実施およびその手法の効果の検証・評価に関し、三鷹青年会議所と三鷹市との間の関係や役割分担、相互協力の内容などを定めることとし、具体的には、協働に関する原則、役割と責務、実行委員会の所掌、協定の有効期限について定めた。プラヌクスツェレに学んだ取り組みとしては、東京青年会議所により千代田区などにおいて既に実施されたものであったが、行政との「協働」による実施は、三鷹市が全国で初めてであった。

まちづくりディスカッションの企画・運営(テーマ設定を含む)は、パートナーシップ協定にもあるように「みたかまちづくりディスカッション2006実行委員会」によって行われたが、この実行委員会には、三鷹青年会議所メンバー(12人)や三鷹市職員(4人)だけでなく、三鷹市民(6人)も含まれており、幅の広い構成となった。

まちづくりディスカッションは、プラヌクスツェレの手法をそのまま導入するのではなく、プラヌクスツェレや社団法人東京青年会議所千代田区委員会の「市民討議会」に学びながらも、三鷹市の市民参加・協働の歴史を踏まえ、三鷹の地域性に応じた工夫を行うこととした。

なお、2006年4月1日に「三鷹市自治基本条例」が施行されたが、まちづくりディスカッションは、三鷹市自治基本条例に謳われた「市民自治による協働のまちづくり」のための話し合いの実現として位置づけることができる。まちづくりディスカッションを実施することにより、まちづくりに関して市民が意見を出す機会を創造するとともに、異なる立場の市民の意見を聞いて、まちづくりの方向性や具体的な方策の形成を行う機会となると考えられる。

### 2. まちづくりディスカッション当日の流れ

ここでは、まちづくりディスカッション当日の流れについて概要を説明する。

#### (1) 参加者

まちづくりディスカッションの参加者の決定は、三鷹市自治基本条例において、住民投票実施請求ができる年齢が18歳以上の市民とされたことから、18歳以上の市民を対象に住民基本台帳から無作為抽出を行い、選ばれた1,000人に参加を呼びかける依頼書を送付するところから



始めた。当初の予定参加者数は45人であったところ、依頼を承諾した市民は、予定数の2倍近くの87人であった。全員の参加は会場の都合などから困難であったので、抽選を行い60人とした。

まちづくりディスカッションの当日の参加者は、2006年8月26日(土)は52人、27日(日)は51人であった。

(2) テーマ

今回のメインテーマは「安全安心のまちづくり～子どもの安全安心～」とした。また、個別テーマは、

第1回 子どもにとって危険や不安を感じるの、どこで、どんな時だと思いますか？

第2回 地域安全マップの作り方・使い方のアイデアを出してください。

第3回 地域の子どもを見る目をふやすためのアイデアを出してください。

第4回 まとめの提案:子どもを犯罪から守るために、こんなことを始めたらどうでしょう。

の4つとした。

(3) 情報提供

1日目は、第1回話し合いのみを行ったが、話し合いの前に三鷹市の現状を把握するため、子どもの安全安心に関して公的にどのようなことが行われているかを「子どもを取り巻く現状と課題」をテーマとして、三鷹市、三鷹警察署、三鷹市教育委員会の3者から情報提供を受けた。第1回話し合いでは、この話し合いの方法に慣れるという意味も含め、子どもにとって危険や不安を感じるの、どこで、どんな時かについて、意見というよりは普段感じていることを話し合ってもらった。2日目は、第2回話し合いの前に「親子で作る！地域安全マップ」をテーマとして、サンケイリビング新聞社主催による地域安全マップ作りの参加者、「三鷹市で作成した地域安全マップ」をテーマとして、三鷹市の安全安心課の職員から情報提供を受けた。また、第3回話し合いの前には、「各地の子どもに対する安全対策の紹介」をテーマとして、サンケイリビング新聞記者から情報提供を受けた。

情報提供の内容

	テーマ	情報提供者	内容
第1回	子どもを取り巻く現状と課題	三鷹市の子どもの安全安心の取り組み	福島安全安心課長(三鷹市) 安全安心パトロール・市民協働パトロール・安全安心メールの配信などを紹介
		学校での子どもの安全対策	竹内総務課長(三鷹市教育委員会) 防犯ブザーの貸与・子ども避難所の設置などを紹介
		子どもの犯罪の発生状況	藤野生活安全課長(三鷹警察署) 市内犯罪発生状況・少年犯罪発生状況などを説明
第2回	親子で作る！地域安全マップ	橋本博子さん 橋本理恵さん	親子で作った地域安全マップの作り方・子どもが危険場所を察知する効果などを体験に基づいて紹介
	三鷹市で作成した地域安全マップ	福島安全安心課長(三鷹市)	三鷹市の地域安全マップの使い方・効果などを紹介
第3回	各地の子どもに対する安全対策の紹介	向山奈央子さん(サンケイリビング新聞記者)	エンジョイパトロール(柏市)・フラワーポット(練馬区)・わんわんパトロール(世田谷区)を紹介

#### (4) 話し合いの方法

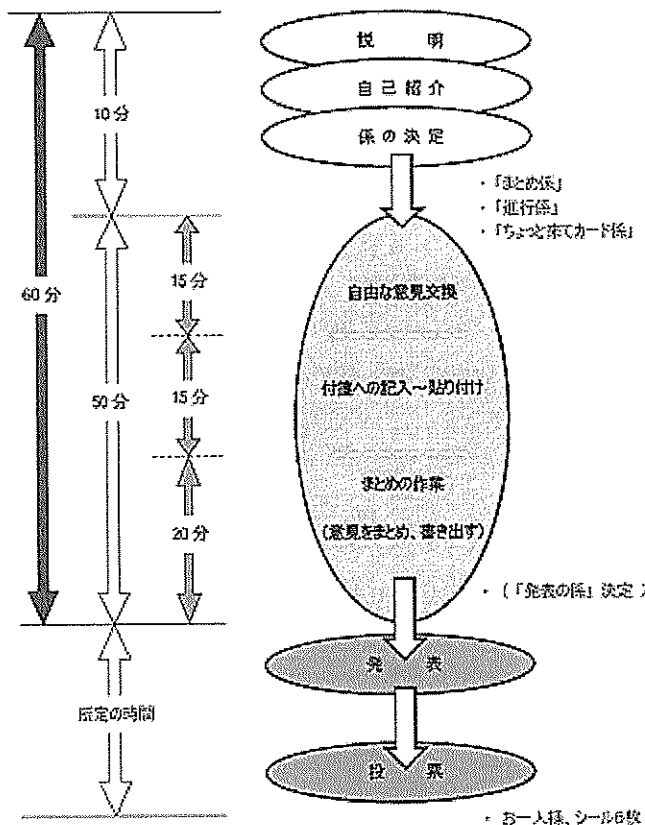
話し合いは、10グループ(1グループ5～6人)で行われ、テーマごとにグループのメンバーを入れ替えた。

話し合いを行うにあたり、それぞれのグループに配置されたスタッフ(補助係)による話し合いのルールの説明や自己紹介の後、グループの全員が「まとめ係」「進行係」「ちょっと来てカード係」となるよう役割を決めた。話し合いを行っている間に、各自の意見を付箋に記入して、「話し合いのシート」に貼り付けていき、それを分類整理して、投票の対象となる「まとめ」(3つ以内)を「話し合いのシート」に記入することとした。また、投票の対象外であるが、必要に応じて「残したい意見」も記入できることとした。

話し合いの時間は、スタッフによる説明やまとめ(「話し合いのシート」の記入)を含めて60分とした。

- まとめ係  
付箋に書かれた意見を、メンバーの同意のもとに1つ～3つに分類し、グループの意見としてまとめる係
- 進行係  
グループ内で時間管理を行う係
- ちょっと来てカード係  
話し合いが進まない場合や何か助けがほしい場合に「ちょっと来てカード」によりスタッフ(補助係)を呼ぶ係

#### 話し合いの流れ



※一人様、シール6枚

#### 話し合いのシート

グループ名	メンバー
〔話し合いのテーマを記入〕	
作業スペース	
まとめ(3つ以内)	投票欄
	投票欄
	投票欄
残したい意見	

#### (5) 発表と投票

1回目の話し合いについては10のグループを3つ(4グループ、3グループ、3グループ)に分けて、それぞれ発表と投票を行い、2回目と3回目は発表を行わず、参加者全員で投票のみを行い、4回目はすべてのグループの発表を行った後、参加者全員で投票を行った。

投票は、テーマごとに一人につき6枚のシールを用いて、それぞれ参加者が適当だと思うアイデアに対して、自由に投票を行うこととした。その際、類似の意見があったとしても、話し合いの過程が異なるのではないかと考えて、今回は、それらのアイデアをまとめることなく、それぞれ参加者の判断により投票を行った。

まちづくりディスカッション 2日間のスケジュール

8月26日(土)[1日目]		8月27日(日)[2日目]	
(参加者52人)		(参加者51人)	
/		10:00~10:40	情報提供「親子で作る！地域安全マップ」「三鷹市で作成した地域安全マップについて」
		10:45~11:45	第2回話し合い「地域安全マップの作り方・使い方のアイデアを出してください。」
		11:45~12:45	昼食・投票
		12:45~13:00	情報提供「各地の子どもに対する安全対策の紹介」
13:00~13:50	主催者あいさつ 趣旨・進め方の説明	13:05~14:05	第3回話し合い「地域の子どもを見る目をふやすためのアイデアを出してください。」
13:50~14:30	情報提供「子どもを取り巻く現状と課題」	14:05~14:40	休憩・投票
14:30~14:45	休憩	14:40~15:40	第4回話し合い まとめの提案「子どもを犯罪から守るために、こんなことを始めたらどうでしょう。」
14:45~15:45	第1回話し合い「子どもにとって危険や不安を感じるのは、どこで、どんな時だと思いますか？」	15:40~15:55	休憩
15:45~16:30	発表と投票	15:55~17:05	発表と投票
/		17:05~18:00	まとめ・結果の扱い方・反映の仕方

●場所: 三鷹市市民協働センター

### テーマ、話し合いの方法、話し合いのルール

メインテーマ	安全安心のまちづくり～子どもの安全安心～	
各回のテーマと目的	第1回	<p>[テーマ]子どもにとって危険や不安を感じるのは、どこで、どんな時だと思いますか？</p> <p>[目的]「まちづくりディスカッション」を進めるにあたり、この話し合いの方法に慣れる意味も含め、まず子どもの安全安心に関する参加者の思いを出し合い、メンバーそれぞれの意見の確認と、情報の共有を行うことを目的とする。</p>
	第2回	<p>[テーマ]地域安全マップの作り方・使い方のアイデアを出してください。</p> <p>[目的]地域安全マップの作り方と使い方の両方について、参加者にできるだけ多くのアイデアを出してもらうことを目的とする。</p>
	第3回	<p>[テーマ]地域の子どもの見る目をふやすためのアイデアを出してください。</p> <p>[目的]地域で子どもの安全を守るためには、子どもを見守る大人の目が多いことが重要。そこで、子どもを見る目をふやすためのアイデアをできるだけ多く出してもらうことを目的とする。</p>
	第4回	<p>[テーマ]まとめの提案「子どもを犯罪から守るために、こんなことを始めたらどうでしょう。」</p> <p>[目的]2日間の話し合いのまとめとして、子どもを犯罪から守るために個人や地域、または公的な機関ができることを提案の形で出してもらうことを目的とする。</p>
話し合いの方法	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 参加者は各回ごとに情報提供を受ける。</li> <li>2. 1グループ5～6人の単位で10グループに分かれ討議する。</li> <li>3. 各グループは各回ごとに意見を3つ以内にまとめる。</li> <li>4. 参加者全員の意見の傾向を見るために投票を行う。</li> <li>5. 各回ごとにグループのメンバーを入れ替える。</li> </ol>	
話し合いのルール	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 会議の目的は結論を出すことです。何かを決めて終わるようにし、後戻りしないでください。</li> <li>2. 出てきたアイデアが実現可能かどうかは考えないでください。</li> <li>3. ひたすらアイデアを出してください。</li> <li>4. 相手のアイデアを否定しないで、ほめてください。</li> <li>5. 全員のみなさんが発言できるようにご配慮ください。</li> <li>6. 人の意見を聞いて、自分の意見を変えてもいいです。</li> </ol>	

## 第2章 話し合いの結果と市民からの提案

この章では、まちづくりディスカッションでの話し合いの結果をまとめ、市民からの提案の内容を詳細に述べる。

### 1. 市民からの提案

まちづくりディスカッションでの話し合いは4回行われたが、各回とも大変内容の充実したものであった。

第1回から第4回までの話し合いの結果をみると、道路や公園などにおいて子どもが犯罪や交通事故に巻き込まれる可能性を指摘しつつ、地域の大人の目が行き届かない時間や場所に子どもが危険な目に遭うのではないかと不安を感じている。そのための対策として地域安全マップの作成、地域のパトロールや見守り活動などがあるが、それらの対策を継続的に実施するうえで、地域の協力が必要不可欠なものと認識されている。また、地域安全マップについては、子どもの安全対策として有効に機能すると認めながらも、PRが不十分であり、その存在が市民に知られていないため、十分活用されていない現状が指摘されている。



以上のことから、次の4点を市民からの提案とする。（詳細は、16～24 ページ参照）

#### (1) 地域社会・地域コミュニティの重要性

子どもの安全安心を確保するためには、地域社会・地域コミュニティの役割が重要であると認識されている。その一方で、地域の活動に参加するには、「きっかけ」づくりが重要である。また、地域の活動へ参加を促す方法として、参加しやすい工夫（日常生活のついでにできるような参加の方法を検討するなど）も求められている。

#### (2) 継続的・安定的に地域活動に参加できる仕組みづくり

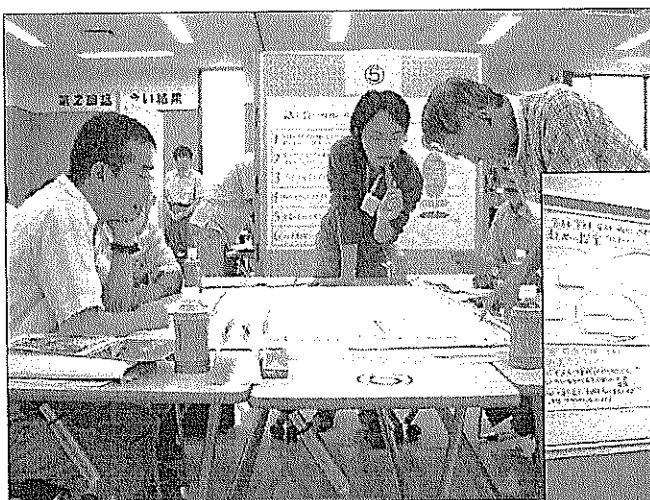
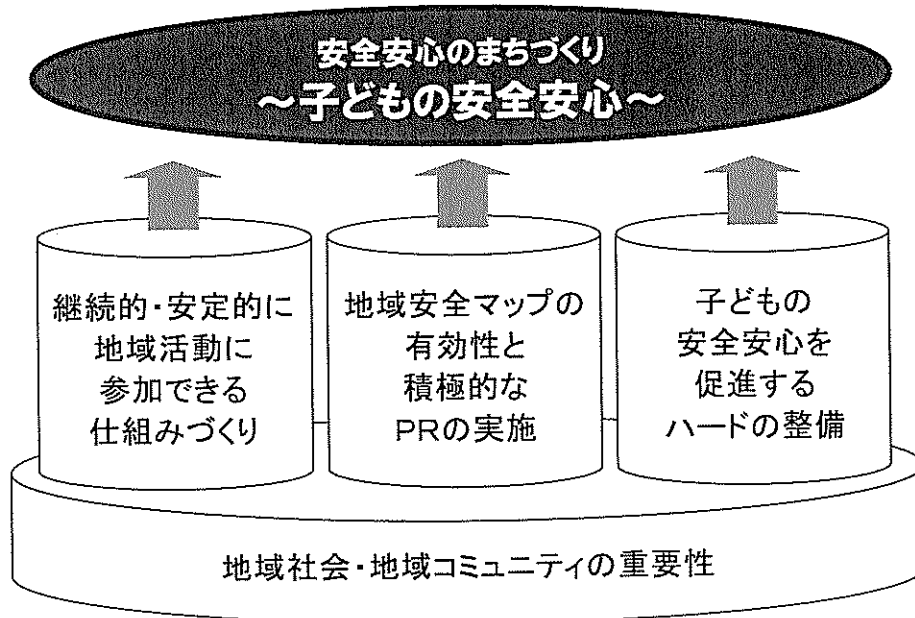
子どもの安全安心のための活動を含め、さまざまな地域のための活動に継続的・安定的に参加するためには、参加者の研修やリーダーの養成、あるいは気軽に参加できる仕組みの検討が必要である。また、例えば、有償ボランティアについて検討するなど、個人の負担が過大にならないような仕組みづくりも必要である。

#### (3) 地域安全マップの有効性と積極的なPRの実施

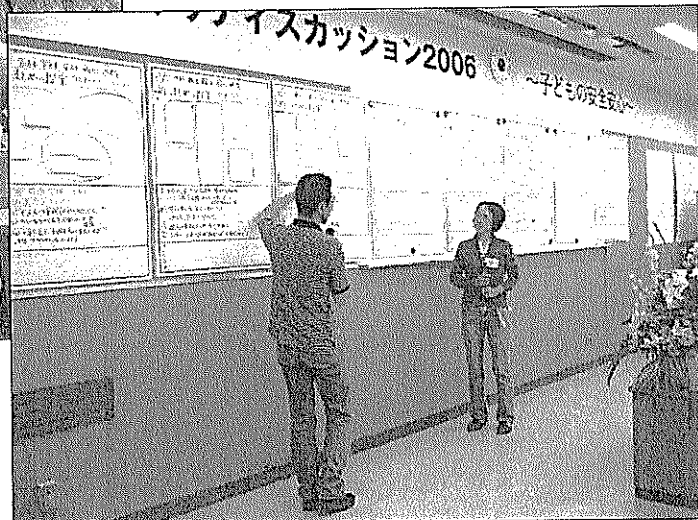
地域安全マップについては、その有効性を認めながらも、その存在が十分に市民に知られず、十分活用されていない面も否めない。したがって、子どもの安全安心を確保する観点から、学校に通わせている子どもを持つ親だけではなく、地域全体に周知を図るなど、三鷹市は、あらゆる手段を活用して、市民にその存在をPRする必要がある。

#### (4) 子どもの安全安心を促進するハードの整備

今回の話し合いの結果から、道路や公園などハード面での整備・管理に関するアイデアも多数寄せられ、また、子どもの居場所の整備に関する意見も寄せられた。このことから、三鷹市の長期的な取り組みとして、従来の防災や交通安全の確保などに加え、犯罪に巻き込まれにくい、あるいは犯罪を引き起こしにくいまちづくりの視点を含め、ハード面での総合的なまちづくりを推進する必要がある。



●話し合いの様子



●発表の様子

## II. 話し合いの分析の方法

第1章のIV2(5)で述べたように今回は類似のアイデア(「話し合いのシート」の「まとめ」に記載されたもの)があっても参加者の判断で投票することとしたので、分類を行い、類似のアイデアをある程度括り、全員の総意を分析する必要があった。

実行委員会では、分析を行うにあたり、分析の客観性を保持するため、2つのワーキング・チーム(①アイデアを趣旨により分析したチーム、②アイデアをキーワードで括り分析したチームの2チーム)により分析作業を行った。それぞれのチームで分析した結果は、概ね同様の傾向を示していた。そこで、実行委員会において2つのチームの検討結果を統合した。

なお、その内容は、2006年9月27日(水)に開催した中間報告会において報告し、出席者(まちづくりディスカッションの参加者52人中18人出席)から了承された。

## III. テーマごとの話し合いの結果

各テーマごとに、IIで述べた方法により分析した話し合いの結果は、次のとおりである。なお、「分類のポイント」は、それぞれのアイデアを分類する際の注意点を記載した。また、参考として、「話し合いのシート」の「残したい意見」を記載した。(各回の話し合いのシートは、69～91 ページ参照)



●全体会の様子(手あげアンケート)



●投票の様子

【第1回話し合い】

子どもにとって危険や不安を感じるのは、どこで、どんな時だと思いますか？

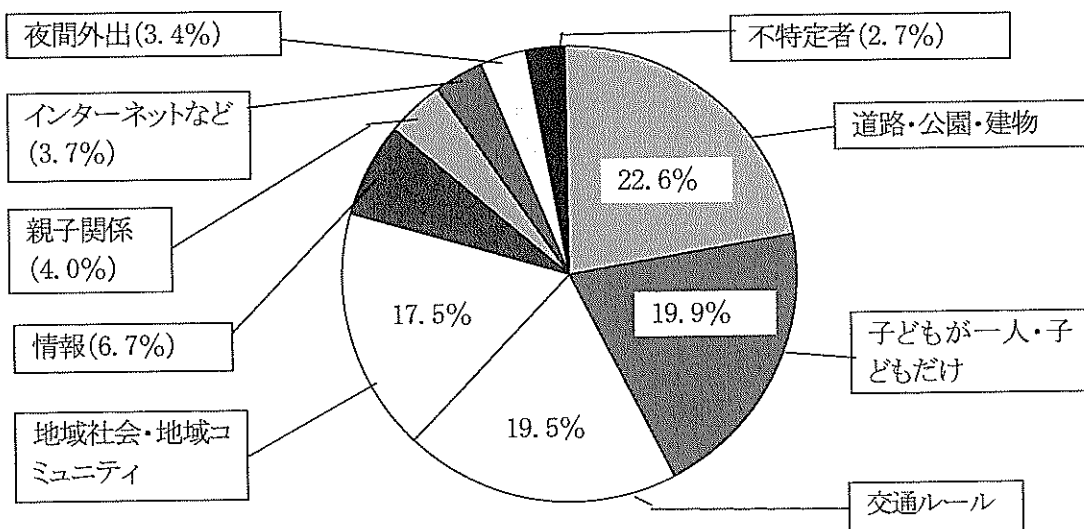
暗く人通りが少ない道路や公園、子どもが一人にいるとき、  
 地域の大人の目が行き届かないときに、危険や不安を感じる。  
 狭い道路、交通マナーが悪い自動車・自転車にも、危険や不安を感じる。

第1回話し合いの投票結果によれば、「道路・公園・建物に関するもの」「子どもが一人・子どもだけである場合に関するもの」「交通ルールに関するもの」「地域社会・地域コミュニティに関するもの」で、全体の4分の3以上を占めている。

「道路・公園・建物に関するもの」については、例えば、道が狭いため、交通安全上危険である場所である場合と、道が暗いため、犯罪が発生しやすい場所である場合の2通り(またはその両方とも)の指摘がなされている。また、「子どもが一人・子どもだけである場合に関するもの」「地域社会・地域コミュニティに関するもの」は、地域の大人の目が行き届かないときに、危険や不安を感じるとの指摘である。

以上のことから、防犯の観点からは、暗く人通りが少ない道路や公園などの場所において、あるいは子どもが一人または子どもだけである時間帯において、地域の大人の目が行き届かないときに危険や不安を感じ、交通安全の観点からは、狭い道路などの場所や交通マナーが悪い自動車・自転車がいるときに、危険や不安を感じると総括することができる。

●子どもにとって危険や不安を感じる場所と時



分類のポイント

「道路・公園・建物」といったハード面でのまちづくりに関するキーワードを1つにまとめた。なお、「子どもが一人・子どもだけ」に分類されたものについても、ハード面でのまちづくりに密接に関連するものがある。

●第1回の特に残したい意見

安心メールのその後～情報が遅いこない！／学校からの情報のその後～情報が遅いこない！／自然災害／子ども、親、教師、近所との関係のキハク化／歩きタバコを止めさせる。／光化学スモッグが心配。／家に誰もいなくて自分で玄関のカギを開ける時。／一人でインターネットを利用している時。／家で一人にいる時。／危険を感じても助けを求める人がいない(日中、不在の家が多い)／友人間での苛め／大人の再教育／携帯電話やネットによるトラブル／検挙率の低下



●第1回テーマの分析結果

アイデア(思い)	得票数	計	得票率
○道路・公園・建物に関するもの			
狭い道路、見通しの悪い道路	11	67	22.6%
通学路や公園等の環境の安全が十分でない	11		
建物・町のつくりの中で、子どもから人が見えなくなる時	11		
通学に適さない危険な道	10		
不審者(通学路、校内、公園、夜間)	9		
暗い人通りのない公園で遊んでいる時や狭い歩道を通っている時	6		
危険な場所	5		
狭い道を通る時	4		
○子どもが一人・子どもだけにいる場合に関するもの			
単独行動(一人歩き)	10	59	19.9%
下校時に人通りの少ない所で一人になる瞬間	9		
親・知り合いから離れ、一人になった時	9		
人気のない場所、暗い場所(道路、公園など)の1人歩き	9		
公園や下校時に子どもだけになるとき	8		
下校時や夕方の帰宅時に一人で居る時	8		
人通りの少ない道や暗い道を一人で歩いている時	6		
○交通ルールに関するもの			
交通ルールを守らない自動車・自転車。	19	58	19.5%
車や自転車に対する危険が多い道路を通行する時	11		
マナーの悪い自転車が通る時	10		
交通環境からくる不安(・交差点・自転車など・明るさ)	9		
交通事故	9		
○地域社会・地域コミュニティに関するもの			
周りの大人達が信頼できるか迷う時	22	52	17.5%
子どもの暮らす周囲において人と人のつながりが希薄である(親も子も)	17		
対人関係の希薄なところ	13		
○情報に関するもの			
現実とバーチャルの区別がつかない時	13	20	6.7%
周囲の情報が十分に与えられていない	7		
○親子関係に関するもの			
親と子ども(・親の注意が不足)	12	12	4.0%
○インターネットなどに関するもの			
漠然とした不安(・インターネット・外出・子どもが独りの時)	11	11	3.7%
○夜間外出に関するもの			
中高生の夜間外出	10	10	3.4%
○不特定者に関するもの			
不特定多数の人に囲まれた時	8	8	2.7%
合 計	297	297	100.0%

【第2回話し合い】

地域安全マップの作り方・使い方のアイデアを出してください。

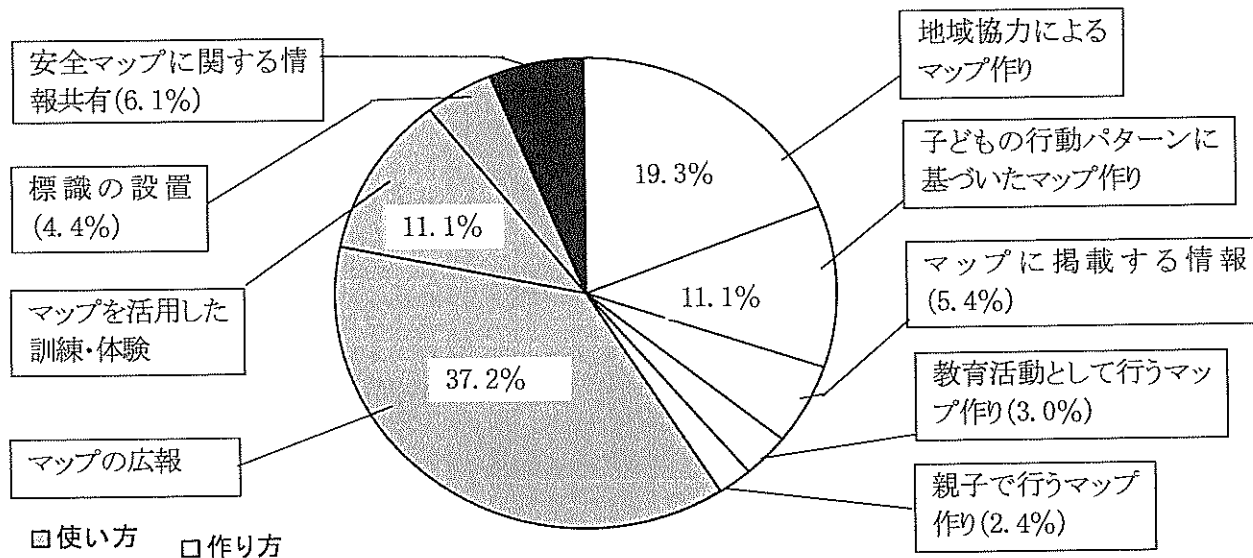
**地域が協力して、地域安全マップを作ることが有効。  
地域安全マップを市民にPRして活用することが大切。  
また、定期的に情報を更新することも必要。**

第2回話し合いでは、テーマが「地域安全マップの作り方・使い方のアイデアを出してください。」であったことから、地域安全マップの「作り方」と「使い方」について、話し合いが行われた。

「地域安全マップの作り方」に関するアイデアのうち、地域の協力に関するものが得票のほぼ半数を占め、地域の協力が不可欠であることが伺える。また、子どもの行動パターンにもとづいた地域安全マップを作成することの重要性も指摘されている。「地域安全マップの使い方」に関するアイデアのうち、7割が地域安全マップの広報に関することである。このことは地域安全マップの有効性を認めつつも、市のPR不足により、市民に十分周知されていないため、有効に活用されていないとの指摘であると考えられる。また、防犯訓練などに地域安全マップを活用するというアイデアも出されている。

なお、地域安全マップの情報を定期的に更新を行うといったアイデアも出されていることから、単にマップを作成するだけではなく、常に新たな情報を求めていることが伺える。

●地域安全マップの作り方・使い方のアイデア



分類のポイント

この回は、地域安全マップの「作り方」と「使い方」に分けて分類した。なお、「安全マップに関する情報共有に関するアイデア」については、「作り方」「使い方」の両方に該当するものと考えられる。

●第2回の特に残したいアイデア

できる限り子ども情報もマップに入れる。／交通事故等が実際に起こった箇所も表記する。／「子どもひなんじょ」をもっとたくさんふやして欲しい。／マップに基づいて地域で安全訓練を行う。／外に立っているだけでも、犯罪を未然に防げる。／老人のために役立つマップ／若い女性の安全マップ／子どもだけが知っている秘密のかくれ家などを把握しておく。／危険箇所の改善を、行政で対応する。／市のホームページで、マップの更新や周知徹底を図る。／注意を促す看板や貼り紙等、周知できる工夫をする！！／マップ作りの効果(犯罪被害の減少、増加)が判らない。

●第2回テーマの分析結果

アイデア(提案)		得票数	順位	計	得票率
作り方のアイデア	○地域協力によるマップ作りに関するアイデア				
	小・中学校だけではなく、地域の組織(商店・町内会・企業・高校・大学等)に声をかけ作成。	16	4	57	19.3%
	地域の人も一緒に歩こう！(町内会・老人会・子ども会など)	13	7		
	親子それぞれの視点で、実際に歩き、家庭で話し合い、さらに地域の活動グループ(子ども会など)も活用し、学区だけではなく子どものエリアのものを作る。	10	10		
	子ども(その家族)だけでなく幅広い年齢層を巻きこんで作る。	8	18		
	地域全体(保護者、子ども、警察官、住民)で、マップを作り、情報を更新していく	7	19		
	子どもの危険意識を高めるために、地域単位で、子どもと一緒に作成する。	3	30		
	○子どもの行動パターンに基づいたマップ作りに関するアイデア				
	子ども自身に、1週間の生活の記録を付けさせ、その行動パターンに合った安全マップを作る。	18	2	33	11.1%
	狭い範囲を詳しく、大きく、言葉を使ってマップを作る(ぬり絵地図)	15	5		
	○マップに掲載する情報に関するアイデア				
	マップに「災害避難場所」、「改訂年月日」を追加表記する。	7	19	16	5.4%
	特に危険な場所の記載(年齢別・時間別・携帯用)に範囲を決めたマップにする。	5	28		
	作る過程も重要、又変化するので毎年更新する。	4	29		
	○教育活動として行うマップ作りに関するアイデア				
交通安全教室・総合学習への出前授業でマップ作成・見直しをはかる。	9	10	9	3.0%	
○親子で行うマップ作りに関するアイデア					
子どもといっしょに歩き、確認しながら、我が家マップをつくる。	7	19	7	2.4%	
使い方のアイデア	○マップの広報に関するアイデア				
	安全マップの見直しを常にして、最新情報をインターネットや掲示板で知らせる。	17	3	110	37.2%
	児童がいない家庭への配布(白黒版でよい)。地域への掲示、インターネット等で、情報を広く知らせる(キャンペーン等)	15	5		
	安全マップを全家庭に配り、住民一人一人に意識を持ってもらう。	11	9		
	「安全マップ」(他地区、転入者)をどこで入手できるのかを周知する。	10	10		
	全戸配布し、全ての住民に知らせ、でき上がったマップの危険ヶ所の改善と継続(使い方の工夫)	9	13		
	市民全員に配布、呼びかけ！(ネット公開含む、コミセンまつり)	9	13		
	安全マップを、人の集まる場所に表示する。(インターネット、駅など)	7	19		
	人の多く集まる場所に、拡大した安全マップを掲示する。	7	19		
	個々のニーズに合ったみせ方 名称(ひとり歩き～高齢者・中高生etc)、ズームイン・アップ(範囲を自由に変更して出す) ※いろいろな人のアンテナにひっかける。	7	19		
	市民全員に配布する。 ※大人の意識を高める。	6	25		
	回覧板や保護者会などを利用し、親への意識(危機感)を高める。	6	25		
	子どものいない家庭にも、安全マップを配布する。	6	25		
	○マップを活用した訓練・体験に関するアイデア				
	マップを使った防犯訓練を実施し、子どもに身を守る体験をさせる。	23	1	33	11.1%
顔の見えるようなMAP・一工夫/MAP上だけではなく「直で会う」「学校行事」等を使って顔が見えるようにする。	10	10			
○標識の設置					
危険カ所に標識をつける。	13	7	13	4.4%	
共通	○安全マップに関する情報共有に関するアイデア				
	小さいことが多発しているが事例を報告して欲しい！	9	13	18	6.1%
	情報の共有化→拡大/家単位のMAP→学校・地域→行政→市民へ	9	13		
合 計		296		296	100.0%

【第3回話し合い】

地域の子どもを見る目をふやすためのアイデアを出してください。

**地域の子どもを見る目をふやすためには、地域住民の協力が不可欠。「地域デビュー」のきっかけ作りや地域の活動に気軽に参加できる仕組みも必要。防犯グッズの配付など行政のバックアップも必要。**

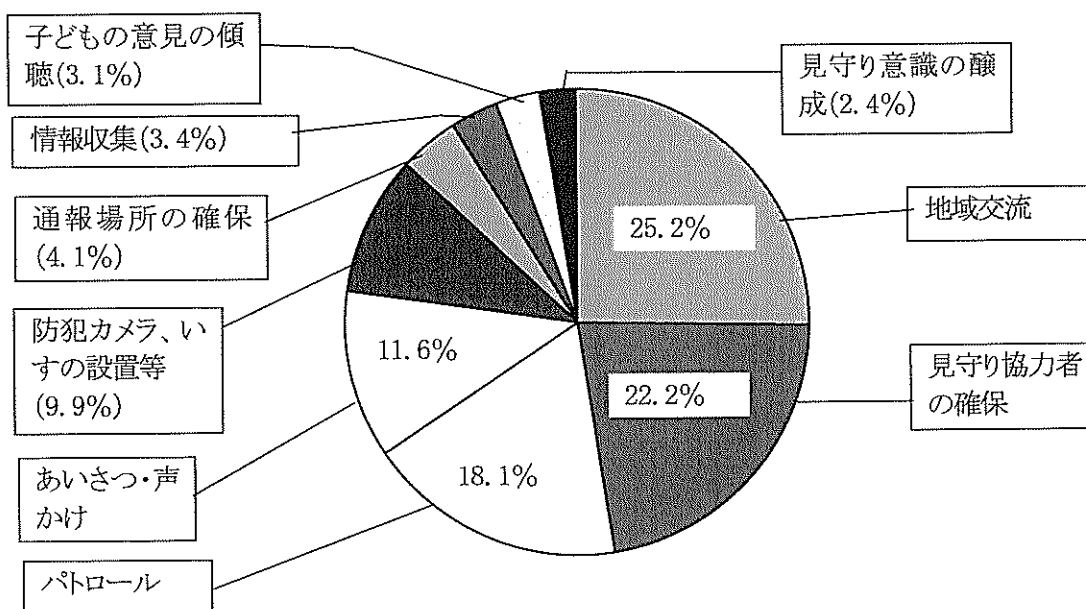
第3回話し合いの投票においては、「地域交流に関するアイデア」「見守り協力者の確保に関するアイデア」「パトロールに関するアイデア」「あいさつ・声かけに関するアイデア」で、全体の4分の3以上の得票率となっている。

これらのアイデアの多くは、地域住民の協力によってある程度実現できるものと考えられる。しかし、現在地域住民がお互いに知り合う機会が少ないため、これらのアイデアの実現の前提として、「地域デビュー」のきっかけ作りが不可欠であると指摘されている。また、パトロールや見守りなど地域の活動に参加する場合も、気軽に参加できる仕組みや雰囲気づくりの必要性も読み取ることができる。

行政の役割として、地域が行うパトロールに対して防犯グッズを配付するなど地域の活動のバックアップや通報場所の確保などが望まれている。

なお、防犯カメラの有効性を指摘する意見も1割弱ある。

●地域の子どもを見る目をふやすためのアイデア



分類のポイント

「見守り協力者の確保に関するアイデア」については、その内容は多様であるが1つにまとめた。

●第3回の特に残したいアイデア

親も意識改革が必要(関心を持つ) / 統一した腕章、ステッカーを使う / 子どもの生態について、情報提供が必要 / 警察のパトロール間隔を短くする。個人宅訪問。 / 防災無線による防犯のお知らせ。 / あいさつ運動(教育現場、駅、交差点等) / 学校の協力による、教職員の朝の見回り。 / 玄関先にポスターではなく旗などの立体的なものを目印として置く。 / 家の前の道をもう少し広げて、人が外に出やすい環境をつくる。 / この人は安心して人だというPRをする。(丸池おじさん、もの知りおじさん・etc.) / 日常生活の中で子どもの行動に注意を払う。 / 近隣地域との協力と話し合い。 / ビジュアル的に警鐘を促がす様な催しを。 / スクールバス、タクシーで戸への通学。 / 見る目の質を変える。お祭りなどで顔見知りになったり、挨拶する仲になったり。

●第3回テーマの分析結果

アイデア(提案)	得票数	順位	計	得票率
<b>○地域交流に関するアイデア</b>				
地域の住民と児童のコミュニケーションの機会をつくる。(地域のイベント・寺子屋・遊びの大会など)	22	1	74	25.2%
地域イベントを通して、近所の子供と顔見知りになる。	16	4		
地元の地域の子供達との知り合う機会を作る。(顔見知りになる)	13	7		
シニアの参加を増やす。→地域コミュニティにとけこむ“きっかけ”をつくる!	12	8		
地域の人々が集う活動づくりを通じて、お互いの理解を深め、あいさつができる関係をぎざぎざ	6	20		
子供と大人の交流をしよう。	5	24		
<b>○見守り協力者の確保に関するアイデア</b>				
町内に放送などで、下校時間を知らせ、外に出てもらうように呼びかける。	19	3	65	22.2%
今ある公園を入りやすく遊びやすいように、ボランティアの人に居てもらおう。	15	5		
人目のある場所を作る 又は子どもの集まる場所に仕事として大人が配置される。	12	8		
団塊の世代を積極的に協力してもらおう。	10	14		
住民が家(窓・庭等)から、道路・公園を見守る。	5	24		
人の確保(専門家・店・時間のある人)	4	26		
<b>○パトロールに関するアイデア</b>				
各家庭に帽子腕章を配り、市民に自由にパトロールをしてもらう。	14	6	53	18.1%
市民・企業・官庁との相互連携によるパトロール	11	12		
手軽で目立つ(帽子・ワッペン・タスキ等)防犯グッズを配布し、日常生活時に身につける。	11	12		
防犯レンジャーの結成!(自転車部隊!!!)	9	16		
地域による自主パトロールの推進。(多くの人が参加できるような体制づくり)	8	18		
<b>○あいさつ・声かけに関するアイデア</b>				
子供の意識改革 子供も小さい子供を見守る。 人に出会ったらあいさつをする。	22	1	34	11.6%
大人から子供、子供同士で積極的に声をかけあう。	6	20		
子供に声をかけよう。(大人も子どもお互いに声をかけやすいように腕章つける)	6	20		
家の外に出て声をかけたり見守ったりしよう!!	0	30		
<b>○防犯カメラ、いすの設置等に関するアイデア</b>				
防犯環境を整える。(監視カメラ・通学路に椅子・テレビつきインターホン etc)	12	8	29	9.9%
防犯カメラ・警告カンバン等の設置により犯罪者を近づけない。	6	20		
間接的な「目」を増やす。(カメラ設置・大人の自転車は全てパトロール中。あれっと感じたら連絡する所を作るなど)	4	26		
監視カメラの設置(公園、広場、畑の多い地域など)	4	26		
防犯カメラ等を設置し、危険箇所の減少を図る。	3	29		
<b>○通報場所の確保に関するアイデア</b>				
青少年の不審な行動を、彼らが立ち寄りそうなお店(コンビニやファミレス)の人に報告してもらえるような、通報場所を設ける。	12	8	12	4.1%
<b>○情報収集に関するアイデア</b>				
市のホームページに、地域別の「掲示板」を設け、各地域の市民から、直接情報をもらう。	10	14	10	3.4%
<b>○子どもの意見の傾聴に関するアイデア</b>				
子供の意見をきく機会を作る。	9	16	9	3.1%
<b>○見守り意識の醸成に関するアイデア</b>				
大人が子供を見守るという意識をもとう!	7	19	7	2.4%
合 計	293		293	100.0%

【第4回話し合い】

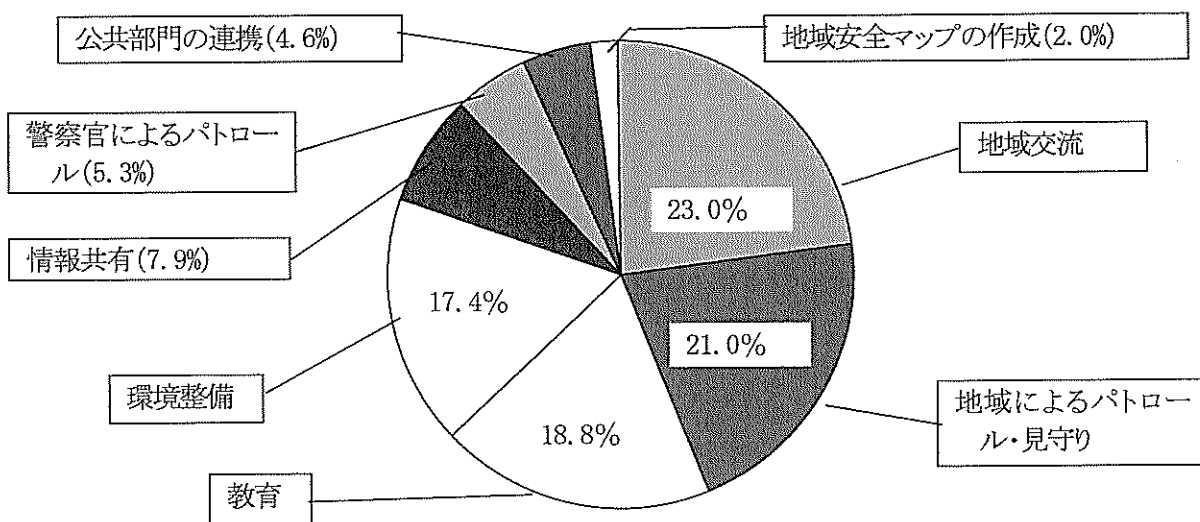
まとめの提案 「子どもを犯罪から守るために、こんなことを始めてはどうでしょう。」

初めに地域住民同士のコミュニケーションを密にすることが重要。  
 パトロール・見守りのリーダーの養成や有給リーダーの設置が必要。  
 歩道、街路灯などの整備も不可欠。

第4回目の話し合いの投票結果を見ると、「地域交流に関するアイデア」「地域によるパトロール・見守りに関するアイデア」「教育に関するアイデア」「環境整備に関するアイデア」がそれぞれ2割前後の得票を得ており、それら4項目の合計で全体の8割を占めている。

アイデアの内容を見ると「地域交流に関するアイデア」や「地域によるパトロール・見守りに関するアイデア」については、「見守る人の養成」「有給のリーダー」「リーダーの育成」「プロモーターづくり」といった言葉が示すように、参加者の研修の実施や活動の中心となる人の養成が望まれている。また、地域のイベントなどによりお互いを知る機会(コミュニケーションの場)を設け、あるいは日常生活のついでにできるなど気軽に(時間を選ばず)参加できる仕組みが望まれている。「教育に関するアイデア」については、家庭教育の充実が望まれている。「環境整備に関するアイデア」については、歩道や街路灯の整備のほか、子どもの居場所の整備の必要性が指摘されている。

●子どもを犯罪から守るための意見



分類のポイント

「教育に関するアイデア」については、家庭教育・学校教育の双方を含めた。また、「環境整備に関するアイデア」については、いわゆるインフラだけではなく、子どもの居場所づくりも含めた。

●第4回の特に残したい意見

防災無線による防犯活動／警察によるパトロール強化／今回のような集まりをこれからも行い一人一人に意識をもたせる。／性犯罪前科のある人の実名公表や監視強化、罰則の強化／今回のWS(ワークショップ)の縮小版を地域単位で開催する。／自分の子どもだけでなく人の子どもの目も向ける。／行政に結果を出していただくよう、お願い致します。／時間帯別による危険地域の周知徹底／犯罪多発地域をリストアップし(警察情報)マップに生かす。／危険場所の排除、改善／親の意識改革／メディアの意識改革／スポーツ、文化振興などに参加し素直な心を養う／被害者、加害者両面のことを考える必要性

●第4回テーマの分析結果

アイデア(提案)		得票数	順位	計	得票率
○地域交流に関するアイデア					
地域活性のためのプロモーターづくり⇒ご近所さんの顔を知る!	15	5	70	23.0%	
年齢の違う子ども達が、集まれる場所として、子ども会を復活させ、子ども同士のつながりを作る	14	7			
地域住民・年長・年少間のコミュニケーションの充実(指導員の育成-遊び、読書等、寺子屋方式)	12	10			
コミュニケーションをはかり、地域住民同士の信頼関係を築く。 (参加をする「きっかけ」(になる情報)が欲しい。)	9	13			
人間関係を深くするためにイベントを行い、市民・企業・官庁との交流をはかる。	8	16			
地域社会の協力(子ども会の充実・イベントの実施・子どものあいさつなど)	6	22			
まず一人一人がボランティアなど出来る事から始めよう。	4	28			
地域♥ぐるみで子どもを守ろう!	2	30			
○地域によるパトロール・見守りに関するアイデア					
見守り人の養成(無作為抽出や、団塊の世代の能力の活用。)有給のリーダーが必須。	27	1	64	21.0%	
夜も光る腕章作戦(会社帰りの人も参加できる見守り。)	13	9			
自由なパトロールの充実・組織化(腕章・帽子の配布・リーダー等の育成など)	9	13			
地域で住人間であいさつの実行、外へ出でのパトロール行う。(時間・場所の制限なしで)	9	13			
帽子、腕章、等を身につけ、地域全体で見守る。	6	22			
○教育に関するアイデア					
我が子の教育の最終責任は親(子どもを理解する。)	16	4	57	18.8%	
家庭内で親と子どもがしっかり話をしコミュニケーションをとり、理解する(子どもの考えを)	15	5			
学校や家庭で、善悪をしっかり教える。	11	11			
身を守る為の教育を子どもと大人にする。	8	16			
子どもが危険を判断できる教育をする。(なぜ危ないかを考えよう)	7	21			
○環境整備に関するアイデア					
町並みの整備(歩道の整備、壁の高さ、街路灯設置など)	20	2	53	17.4%	
児童館を増やす。(市内に2つだけは少ない。)/中高生の居場所をつくる。	19	3			
犯罪防止のインフラの整備と運用(GPS、街灯、交通規制 etc)	6	22			
環境整備の充実(危険マップを通した活用)	5	27			
子どもを一人にしない環境づくり(・空き教室利用・道の整備etc)	3	29			
○情報共有に関するアイデア					
市民側からの情報提供出来る仕組みを作る(インターネット等の利用拡大)	8	16	24	7.9%	
危険情報(犯罪情報等)の周知、(インターネット・広報誌等)	8	16			
過去の事例を地域で共有し、子どもに注意を促す(防犯ブザーを持たせる)	8	16			
○警察官によるパトロールに関するアイデア					
警察官の増員をしてください。(パトロール強化)/防犯カメラ、看板設置など	10	12	16	5.3%	
防犯環境を整える。特に警察官の巡回を強化していただきたい。	6	22			
○公共部門の連携に関するアイデア					
警察・役所・学校で連携し協議会を作る。	14	7	14	4.6%	
○地域安全マップの作成に関するアイデア					
市区を超えた自分たちの生活に合ったマップをプロの指導で作る。	6	22	6	2.0%	
合 計		304		304	100.0%

第4回話し合いの結果を前ページの区分によってチャート化したものが、下図である。縦軸に「行動する」と「整備する」を、横軸には主体者である「市民」、「地域」、「公共機関」をとる。

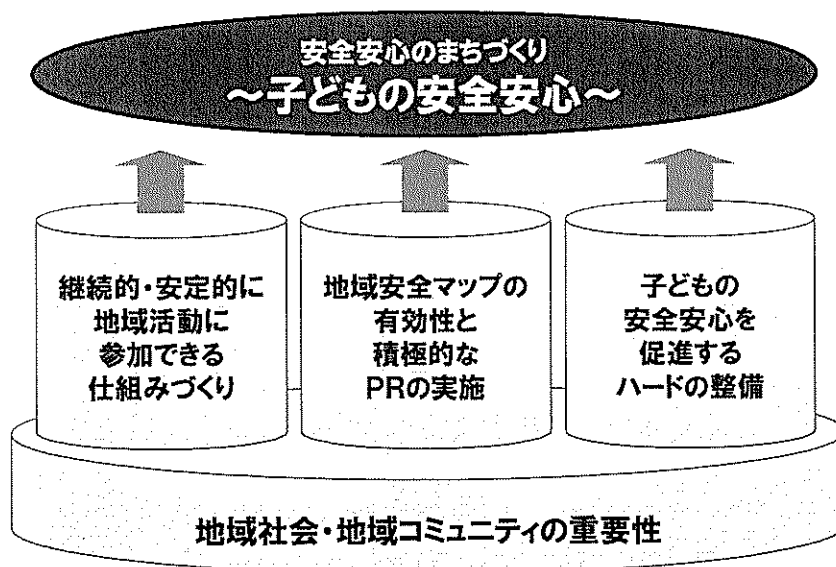
「行動する」については、公共機関では学校、警察、市役所などの連携及び警察によるパトロールの強化などが求められており、同時に地域交流や地域によるパトロール・見守り活動などについても、地域が主体となって取り組む課題であることが明確になる。

また、安全安心に関する教育については、学校教育、家庭教育、地域での教育と、さまざまなレベルで連携して取り組む必要があると思われ、地域安全マップの作成方法や情報共有についても、同じように公共機関と市民や地域の協力が必要である。

「整備する」では、市役所などの公共機関が中心となって役割を担う必要がある。

行動する		地域交流	公共部門の連携
		地域によるパトロール・見守り	警察によるパトロール
		安全安心の教育	
		地域安全マップの活用	
整備する		情報の共有	
			防犯環境の整備
	市民	地域	公共機関

これらの提案の背景には、まずコミュニティーの醸成が不可欠であることが意識されている。このことを踏まえ、話し合いの結果を総合すれば下図のとおりとなり、第4回の話し合い結果の全体像がより明確に理解されるものと思われる。





## 第3章 まちづくりディスカッションの検証と評価

この章では、新しい市民参加＝まちづくりディスカッションの効果と手法について検証および評価を行い、その有効性について検討を行う。

### 1. まちづくりディスカッションの有効性

まちづくりディスカッションは、参加者の無作為抽出や参加者への謝礼の支払いなどを特徴とするドイツの市民参加の手法であるプラーヌクスツェレに学びながらも、今回三鷹市において実施するにあたり、パートナーシップ協定の締結や実行委員会による企画・運営など、さまざまな工夫を行った。

今回のまちづくりディスカッションの効果と手法について検討と評価を行った結果、その有効性が明らかになった。(検証と評価の詳細は、32～43ページ参照)

今回の取り組みの最大の成果は、まちづくりディスカッションへの参加を承諾し、すばらしい話し合いと質の高い提案を行った市民に出会えたことだといえる。

#### 1. 効果のまとめ

検証・評価の結果、次のとおり、まちづくりディスカッションの効果が明らかになった。さらに、参加を承諾し、あるいは都合がよければ参加したいという市民が実行委員会の予想を超えて多数あり、三鷹市においては、この手法を継続して実施できる条件を備えていることが証明された。

##### (1) 質の高い提案

参加者の質の高い話し合いにより、話し合いの結果である提案の内容が、市民や地域で実施すべき課題と行政で実施すべき課題とが区別されており、それぞれ実現可能性が高いものとなっている。このことから、三鷹市の施策に反映すべき内容を備えた質の高い提案が期待できる。

##### (2) 参加者の高い満足度

参加者アンケートに示されるように、まちづくりディスカッションの参加者の76%が大変満足または満足と回答しており、また、82%が再度参加してもよいと回答している。このことから、今後この取り組みを継続することが期待できる。

##### (3) 参加意識の高まり

参加者アンケートにおいて、「市民としての意識を持つきっかけとなった」「市民が話し合う場をもっと設定すべき」などの意見が多数寄せられた。このことから、まちづくりディスカッションの取り組みにより、自分たちのまちは自分たちがつくるという参加意識が高まったといえる。

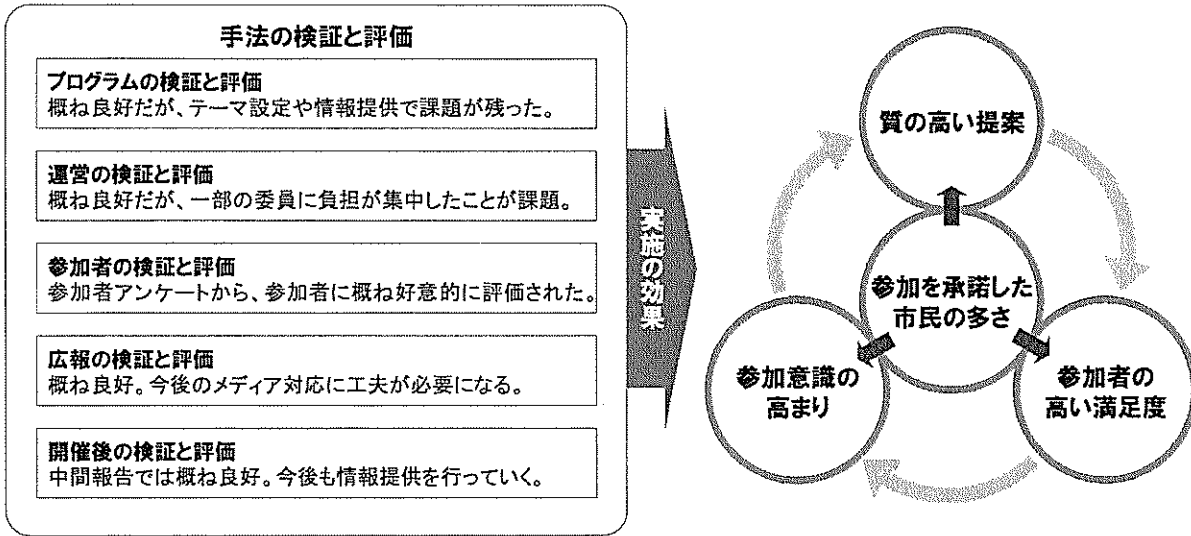
##### (4) 参加を承諾した市民の多さ

無作為抽出により1,000通参加依頼書を送付し、87人という多数の市民から参加の承諾を得たため、三鷹市においては、まちづくりディスカッションによる市民参加の手法の実施が今後も可能であるといえる。

## 2. 手法のまとめ

「三鷹版」プラクティクスツェレであるまちづくりディスカッションの実施にあたり、さまざまな工夫を行った。その結果、プログラム設計、パートナーシップ協定、運営組織、スタッフ、無作為抽出による参加者募集や参加者への謝礼、広報、中間報告会など、あらゆる面において、概ね評価できるものとなった。

ただし、一部の実行委員に負担が偏ったことや、話し合いのテーマの設定方法および情報提供の内容について、改善すべき課題が残った。



## II. まちづくりディスカッションの手法の特徴 ～プラーヌクスツェレとの比較で～

まちづくりディスカッションは、ドイツの市民参加の手法であるプラーヌクスツェレに学びながらも、今回三鷹市において実施するにあたり、さまざまな創意工夫を行った。その特徴は、次のとおりである。

### 1. パートナーシップ協定の締結

まちづくりディスカッションは、明るく豊かな社会を築くことを目的とした三鷹青年会議所と、市民参加と協働のまちづくりを推進する三鷹市※とが、まちづくりディスカッションの実施およびその手法の効果の検証・評価に関し、三鷹青年会議所と三鷹市との間の関係や役割分担、相互協力の内容などを定めるため、2006年5月に「みたかまちづくりディスカッション2006」の実施に関する協定書（パートナーシップ協定。55ページ参照）を締結し、協働で開催した。（プラーヌクスツェレでは行政機関と大学研究所等との委託契約により実施する。）

※ 三鷹市は、市民自治による協働のまちづくりを一層推進するために、平成18年4月に市の最高規範である三鷹市自治基本条例を施行した。この条例には、協働のまちづくりを推進するためのパートナーシップ協定の締結について謳われているが、本パートナーシップ協定は、条例施行後、第1号の協定となった。

### 2. 市民を含めた実行委員会による企画・運営

まちづくりディスカッションの企画・運営（テーマ設定を含む）は、「みたかまちづくりディスカッション2006実行委員会」によって行われた。実行委員会の構成は、市民6人、三鷹青年会議所12人、三鷹市職員4人の合計22人である。（プラーヌクスツェレでは、行政機関がテーマ設定を行い、当日のプログラムの企画や運営は受託者が行う。）

### 3. 完全無作為抽出による参加の呼びかけ

まちづくりディスカッションでは、三鷹市自治基本条例に定める住民投票制度において18歳以上の市民が住民投票の実施請求を行うことができることから、18歳以上の市民を対象に無作為抽出を行い、1,000人に参加依頼書を発送した。この無作為抽出の手法は、プラーヌクスツェレと同様であり、国内では、全国に先駆けて社団法人東京青年会議所千代田区委員会によって行われた方法である。

締め切り日までに送られてきた参加承諾書は予想を超えて87人となり、当初予定していた参加者数45人を拡大して60人に変更し、抽選を行った。

### 4. 話し合いの方法

話し合いの方法は、プラーヌクスツェレとほぼ同様である。その特徴の第1点目は、1グループ5人の単位で、全部で10グループが同時に話し合いを進めたことである。5人の単位は、話し合いを行う場合に黙っている人の少ない、話のテンポを上げる人数と言われている。2点目は、意見の偏りを防ぐために、テーマごとにグループのメンバーが入れ替わり話し合うことである。3点目は、グループの話し合いにより出された意見をグループ内で3つ以内にまとめることである。4点目は、各グループの代表により発表が行われ、全体の意見の傾向を見るために、グループでまとめた個々の意見に対して、参加者が投票を行うことである。

## 5. 参加意欲を促す工夫

まちづくりディスカッションは、三鷹市において全く初めての取り組みであり、市民に知られていないものであった。そこで、無作為抽出により参加者を集める工夫として、2つのことを実践した。第1は、PRに力を注いだことである。チラシ18,000枚・ポスター200枚の配布、広報みたか、新聞・テレビへのプレスリリースなどを行った。第2は、参加依頼書を送る封筒の表に工夫を凝らした。封筒の中に入っている書類内容、主催者を記載するとともに、封筒の中の書類枚数は最小限にし、必ず見てもらえる工夫をした。(66ページ参照)

まちづくりディスカッションとプラークスツェレの手法の比較

	まちづくりディスカッション	プラークスツェレ (標準モデル)
主催者	三鷹青年会議所、三鷹市 (パートナーシップ協定)	ヴタパール大学・市民参加手法研究所など
主管者	みたかまちづくりディスカッション 2006実行委員会	※行政機関から委託を受けて実施
テーマの設定者	みたかまちづくりディスカッション 2006実行委員会	行政機関
テーマ	子どもの安全安心	都市計画、交通対策、住宅計画、 社会政策、消費者の保護対策のガイドライン作り、遺伝子工学の影響、ISDNの導入 など
参加者の選出方法	無作為抽出	無作為抽出
参加者の対象年齢	18歳以上	18歳以上 (最近は16歳以上の場合もある)
参加者数	52人(5～6人×10グループ)	25人(5人×5グループ)
謝礼の有無	有	有
開催日数	2日(計4回の話し合い)	4日間(計16回の話し合い)
1回の話し合い時間	60分 (情報提供は含まない)	90分 (情報提供を含む)
話し合いのための情報提供	有	有
進行役	各グループに補助係を配置 (話し合いには加わらない)	全体で2人の進行役を配置 (話し合いには加わらない)
話し合い結果の行方	市民提案	市民答申

(参考) ドイツの新しい市民参加「プラークスツェレ」

(篠藤明德、地域社会研究第11号プラークスツェレ特集号所収、2005年)

## 6. 検証と評価

まちづくりディスカッションという新たな手法を、今後の市民参加や協働の取り組みに活かすため、参加者へのアンケートやまちづくりディスカッションの実践を踏まえ、実行委員会でこの手法の効果の検証と評価を行った。検証と評価にあたっては、評価できる点、改善すべき点などについて具体的に検討し、課題を抽出するとともに、課題解決の方向性を示すこととした。その結果については、本報告書の32ページ以下に掲載している。

## 7. 当日のスタッフの役割

今回は、初めての取り組みであったことから、万全を期すためにまちづくりディスカッション当日のスタッフを数多く配置した。当日のスタッフとして、補助係、タイムキーパー、全体進行管理、受付等の係を置き、実行委員のほか、運営委員(36ページ参照)などが各係を担った。(プレーヤックスツェレでは、より少人数で実施していると思われる。)

### (1) 補助係

参加者が話し合いを進める際に、進め方やねらいの説明、参加者の話し合いが行き詰った時に話し合いのサポートをする役割(1グループに1人配置)。なお、話し合いには加わらない。

### (2) タイムキーパー

時間を伝える役割

### (3) 全体進行管理

集合時間など参加者全員に案内を行うため、館内放送をする役割

### (4) 受付

参加者・傍聴者・情報提供者・報道関係者の受付、昼食用の弁当の配布その他庶務全般を行う役割

### (5) その他

運営・進行責任者、司会、案内係など

まちづくりディスカッション スタッフ係一覧表

番号	担当	人数	番号	担当	人数
1	主催者・責任者	2人	10	カメラ	2人
2	運営・進行責任者	3人	11	記録係	2人
3	補助係・集計係	10人	12	全体進行管理	1人
4	司会	1人	13	タイムキーパー	2人
5	運営・進行・相談係	2人	14	設営責任者	1人
6	外案内・駐輪場整理	2人	15	総合受付・飲み物サービス係・お弁当係(ゴミの整理を含む)	7人
7	案内係(室内)	2人	16	模造紙移動係	6人
8	講師接遇	1人	17	旗上げアンケートの集計	2人
9	ビデオ	2人	18	救護係	2人
				計	50人

※2つ以上の担当を兼務する場合がある

### Ⅲ. 開催準備から報告書提出までの記録

開催準備から報告書提出までの活動は、次のとおりである。

日付	時間	実行委員会	スタッフ会・その他	事務局
2006. 2. 3		実行委員会設立検討委員会		
2.22		実行委員会設立検討委員会		
3.10		公開フォーラム（主催：三鷹青年会議所）		
3.27	14:00～16:00		打合せ	
4. 4	17:00～19:00		打合せ	
4.14	19:00～21:30	第1回実行委員会		
4.18	10:30～12:00			事務局設置準備
4.20	18:00～21:00		スタッフ会①	
4.28	15:30～17:00		安全安心課長との懇談	
5. 8	19:00～21:30	第2回実行委員会		
5.11	14:00～17:00			事務局
5.18	8:50～ 9:30		パートナーシップ協定調印式	
//	14:00～17:00			事務局
//	18:00～21:30		スタッフ会②	
5.25	10:00～12:00		安全安心課長ヒアリング	
//	14:00～17:00			事務局
//	18:00～19:00		正副委員長及び事務局打合せ	
//	19:00～21:30	第3回実行委員会		
5.29	14:00～15:00		小学校校長会会長ヒアリング	
5.31	17:00～18:00		東京 MX テレビ取材	
6. 1	10:00～12:00		三鷹警察生活安全課長ヒアリング	
6. 2	11:00～13:00		チラシ校正	
6. 5	18:00～21:30		スタッフ会③	
6. 8	14:00～17:00			事務局（ハガキ発送）
6.12	10:00～17:00		参加依頼書封入作業	
//	18:00～19:00		正副委員長及び事務局打合せ	
//	19:00～21:00	第4回実行委員会		
6.15	14:00～17:00		スタッフ会④	事務局
6.19	17:00～22:30		スタッフ会⑤（プレ模擬ディスカッション）	
6.22	14:00～17:00			事務局
//	18:00～20:30		スタッフ会⑥（模擬ディスカッション・最終打合せ）	
6.23	9:00～14:00			事務局（模擬・資料作成）
//	18:00～20:30		模擬ディスカッション前日準備（会場設営など）	
6.24	10:00～16:00		模擬ディスカッション開催	
6.28	20:30～22:00		打合せ（実行委員長・事務局）	

日付	時間	実行委員会	スタッフ会・その他	事務局
6.29	14:00～17:00			事務局
7.4	19:00～21:30		スタッフ会⑦	
7.5	14:00～15:00	公開抽選		
7.6	14:00～17:00			事務局
7.7	18:00～19:00		正副委員長及び事務局打合せ	
〃	19:00～20:40	第5回実行委員会		
7.10	16:00～20:00		スタッフ会⑧(プログラム案検証・内部プレディスカッション)	
7.13	14:00～17:00			事務局
7.14	16:00～18:30		スタッフ会⑨(プログラム案確定)	
7.19	19:00～21:00	第6回実行委員会		
7.20	14:00～17:00			事務局
7.25	10:00～12:00		補助係打合せ	
7.30	10:00～15:30		本番想定内部プレディスカッション	
8.3	14:00～17:00			事務局
8.8	14:00～16:00		補助係打合せ	
〃	16:00～18:00		スタッフ会⑩	
8.10	14:00～17:00			事務局
8.11	17:00～19:00		補助係打合せ	
8.17	14:00～17:00			事務局
8.21	19:00～21:00	第7回実行委員会		
〃	21:00～22:00		補助係打合せ	
8.22	10:00～13:00			事務局(資料作成)
8.23	9:30～13:30			事務局(資料作成)
8.24	10:00～12:00			事務局(資料作成)
〃	14:00～17:00			事務局(資料作成)
8.26	13:00～16:30	本番1日目		
8.27	10:00～18:00	本番2日目		
8.30	18:00～19:00	第8回実行委員会		
9.1	19:00～21:00		スタッフ会⑪(報告書について)	
9.5	19:00～21:00		スタッフ会⑫(結果分析Aチーム)	
9.12	10:00～14:00		スタッフ会⑬(結果分析Bチーム)	
9.14	19:00～21:00	第9回実行委員会		
9.22	17:00～19:00		スタッフ会⑭(中間報告書作成)	
9.23	9:30～11:30		スタッフ会⑮(中間報告書作成)	
9.27	19:00～21:00	中間報告会		
10.2	16:30～18:30		スタッフ会⑯(報告書作成会議)	
10.18	9:15～11:30		スタッフ会⑰(報告書作成会議)	
11.1	19:00～21:00	第10回実行委員会		
11.10	17:00～20:30		スタッフ会⑱(報告書作成会議)	
11.13	19:00～20:30		スタッフ会⑲(報告書作成会議)	
11.28	17:00～21:00		スタッフ会⑳(報告書作成会議)	
11.30	19:00～20:00	第11回実行委員会		
12.14	13:30	報告書提出		

## IV. 検証と評価

ここでは、参加者へのアンケートやまちづくりディスカッションの実践を踏まえ、実行委員会で評価と検証を行った結果について述べる。評価と検証にあたっては、評価できる点、改善すべき点などについて具体的に検討し、課題を抽出するとともに、課題解決の方向性を示すこととした。

### 1. プログラムについて

テーマ設定、プログラム設計、時間配分、話し合いの体制、情報提供、投票に関しては、参加者の話し合いのレベルが高いこともあり、概ね良好な結果を得たといえる。また、実行委員会で独自のマニュアルを作るなどの工夫を行ったことも評価できる。しかし、話し合いのテーマの設定方法および情報提供の内容について、改善すべき課題が残った。

#### (1) テーマ設定

初めて取り組むまちづくりディスカッションを成功させ、この手法の有効性を検証するために、どのようなテーマが適切なのか実行委員会において議論した。

東京都での最近の調査でも、「安全安心」への取り組みに対する関心が強く、また三鷹市でも同様の傾向があるため、「安全安心」をテーマに開催することに決定した。その後、さらに実行委員会で検討していく中で、「安全安心」ではテーマが広すぎ、漠然としているので、今回は「子どもの安全安心」にテーマを絞ることとした。また、その中でも、①犯罪の機会をつくらないまちづくりの推進が必要となっていること、②子どもを取り巻く社会的取り組みが行われている中、課題解決のためには多くの市民の参加が必要となっていることから、「犯罪に遭わないための取り組み」を基本的なテーマとし、安全安心のもうひとつのテーマである「交通事故」については今回直接話し合いの対象としないこととした。

評価できる点	・参加者にとって関心の高いテーマであった点
改善が必要な点	_____

#### (2) プログラム設計

子どもの安全安心に関する現状をよりよくするためのアイデアや、全く新しい発想が出るようなプログラムにしたいとの思いから、まずは現状を知るために、2006年5月下旬から6月初頭にかけて、三鷹市安全安心課長、三鷹市立小学校校長会会長(東台小学校長)、三鷹警察生活安全課長の3人にヒアリングを行った。また、テーマの明確化が重要であるとの観点から、実行委員自身による検証のための話し合い(内部プレディスカッション)を何度も行いながら、プログラム案の改良を積み重ね、参加者が、その都度の話し合いで、何についての提案が求められているのかがわかるようなテーマ設定に努めた。

その結果、第1回話し合いのテーマは、「子どもにとって危険や不安を感じるのは、どこで、どんな時だと思いますか?」とした。第1回は、話し合いに参加することが初めての人にとっても話しやすく、意見の出しやすいテーマにすることを主眼においた。

第2回と第3回のテーマは、それぞれ「地域安全マップの作り方・使い方のアイデアを出してください。」と「地域の子どもの見る目をふやすためのアイデアを出してください。」という具体的なアイデアを出してもらうテーマ設定にした。これらのテーマは、上記のヒアリングを行った際に、三鷹市が作成した地域安全マップが十分に活用されていない現状や市民協働パトロールを拡充するための取り組みを模索しているとの話から決定した。

第4回のテーマは、それまで3回の話し合いを踏まえた総括という位置づけで、「まとめの提案: 子どもを犯罪から守るために、こんなことを始めたらどうでしょう。」とした。6月下旬に行った模擬ディスカッション(スタッフの知人等により試行的に行われたディスカッション)において、「(下校時、子どもを犯罪から守るために)家庭や地域でできること」というテーマ設定で話し合いを行った際に、参加者から「解決方法を家庭ですることと地域ですることにはっきりと分けることはできな



い」との意見があり、最終的に上記のテーマに決定した。しかし、参加者アンケート(135ページの14番・136ページの36番参照)にもあるように、まちづくりディスカッションの参加者にとっては、第3回のテーマと第4回のテーマの違いがわかりづらかったようである。

評価できる点	・改良を重ね、話し合いをしやすいプログラム設計を工夫した点
改善が必要な点	・話し合いのテーマの違いが不明瞭であった点(第3回と第4回)

### (3) 時間配分

全体の時間や各回の話し合いの時間がどの程度なら市民が参加しやすいのかについて議論を重ね、また、実行委員会で模擬ディスカッションなどを実施しながら検討した。参加者の年齢も広範に及ぶことが想定されたため、長時間の開催による参加者離れも懸念されたが、あまり時間を短縮すると話し合いの時間が減ってしまい、満足のいく話し合いができなくなるという不安もあった。最低4回の話し合い回数を確保しつつ、参加者の負担を考慮し、11ページのようなスケジュールとなった。話し合いの時間(60分)については、参加者アンケート項目の3(128ページ参照)において、28人が「時間はちょうどよいと思った」(なお、「60分は短いと感じた」は15人、「60分は長いと感じた」は0人)という結果となった。

また、全体的な配慮としては、休憩時間・休憩場所の確保やアイスブレイクを取り入れるなど参加者がリラックスできる雰囲気づくりにも努めた。

評価できる点	・現在実施可能な日程の中で、一定の成果を上げることができる時間配分であった点
改善が必要な点	_____

### (4) 話し合いの体制

参加者主体の話し合いを進めるため、ファシリテーター(人々の話し合いの場を仕切り、事前に合意された会議のルールに沿って、円滑に成果へたどり着くよう、会議を運営する役割を果たす人)は置かず、各グループに「補助係」を設置し、話し合いの進め方や時間配分などの説明を行うこととした。さらに参加者全員が各グループにおいて「まとめ係」「進行係」「ちょっと来てカード係」の役割を担うこととした。

結果的に参加者は52人(2日目は51人)だったため、1グループにつき5～6人で10グループとなった。参加者アンケート項目の3(128ページ参照)においても、43人が「グループの人数はちょうどよいと思った」と答えている(なお、「多いと感じた」「少ないと感じた」は0人)。

また、いわゆる「声の大きい人」だけが発言するのではなく、均等に発言ができるようにするため、話し合いごとにグループのメンバーを入れ替えた。なお、グループ分けについては、当日欠席者が出てくることも想定されたため、1日目(1日目は1回の話し合いのみ)の出席状況を確認して、2日目の朝受付を行う際にグループ分けの表を参加者に配付した。このため、席の移動はスムーズに行われた。

「補助係」は、参加者に話し合いの方法の説明を行うため、各グループ間に説明の違いが生じないよう、何度も話し合いを重ね、マニュアルを完成させた。また、参加者が話し合いをスムーズに進めるための環境づくりとして、「話し合いの流れ」(10ページ参照)や「話し合いのルール」(12ページ参照)を見やすい場所に掲示するなどの工夫もした。「話し合いのシート」(模造紙。10ページ参照)については、まとめを促すような作り込みはせず、作業のやすさのみを考えて作成した。

以上のように、実行委員会では、いかにすべての参加者が話し合いにスムーズに参加できるか、という議論に多くの時間を費やしたが、実際には、仕事でこのような会議に慣れている参加者がいたり、回を重ねるごとに、よりやりやすい方法を参加者自身が考えたりして、実行委員の予想をはるかに超えて参加者同士がすばらしいコミュニケーションをとっていた。この経験により、まちづくりディスカッションの手法に大きな可能性を感じた。

評価できる点	・参加者の話し合いのレベルが高く、スムーズに進行した点 ・話し合いの方法の説明について、マニュアルを作成し、グループ間の統一を図った点
改善が必要な点	_____

**(5) 情報提供**

情報提供者は、参加者の現状や課題の認知度に差があるため、公平・中立な立場の学識経験者などにより行う必要があった。当初学識経験者による情報提供を予定していたが、話し合いの組み立てが二転三転したこともあり、調整が困難であった。今回はアイデアを出してもらったための話し合いであったので、情報提供として現状の取り組みの説明や新たな取り組みの紹介などを行うこととした。

情報提供者は、三鷹市、三鷹警察署、三鷹市教育委員会、サンケイリビング新聞記者、同社主催の地域安全マップ作り参加者であったが、特に初日は行政の立場からのみの情報提供となった点、また現在抱えている課題についての指摘が少なかった点については、今後に向けての反省材料としたい。一方、地域安全マップ作りの参加者による情報提供は、提供者自身の地域安全マップ作りの体験をもとになされたもので、手作りの資料を利用し、具体的で大変わかりやすかった。サンケイリビング新聞記者による情報提供についても、各地の取り組みを詳細に紹介していたため、とても興味を引く内容であり、話し合いの参考になった。

なお、参加者アンケート項目の2(128ページ参照)では、「分かりやすかった」と「大変参考になった」をあわせて49.2%あり、また、「もう少し詳しく聞きたかった」は33.3%であった。

(情報提供の内容については、9ページ参照)

評価できる点	・サンケイリビング新聞主催の地域安全マップ作り参加者による情報提供は、地域安全マップ作りの体験をもとになされ、わかりやすかった点 ・サンケイリビング新聞記者による情報提供は、各地の取り組みを紹介し、話し合いの参考になる事例が多かった点
改善が必要な点	・行政による情報提供は、現在抱えている課題についての指摘が少なく、話し合いの参考としては内容が弱かった点

**(6) 話し合いの内容と投票**

実行委員会では、各グループの話し合いの結果について、かなり抽象的なものになるのではないかと考えていた。しかし、第2章で述べたように、各グループの話し合いの結果は、市民や地域で実施すべき課題と行政で実施すべき課題とが区別されており、それぞれ実現可能性が高いものばかりであった。また、話し合いの結果だけではなく、話し合いの過程においても、参加者の力量が高く、自然に役割分担ができ、すばらしい話し合いとなった。したがって、投票の結果についても、十分説得力を持つことは、自然の流れであった。

投票の方法については、話し合いにより各グループ3つ以内に意見をまとめ、それに対して参加者全員でシール(1回の投票につき6枚)を使用し、賛同する意見に投票することで、参加者の考えの傾向をつかむ工夫を行った。模擬ディスカッションでは、参加者が書いた付箋を類似した意見ごとにマジックで囲んでグループ分けしたのに対して投票を行ったが、この方法だと囲み全体に対する票なのか、個々の付箋に対する票なのかがわかりにくかったため、本番の「話し合いのシート」では、付箋を貼る作業スペースと「まとめ」を文章化して書く欄を分けて作成した。また、模擬ディスカッションでは、「残したい意見」にも投票を行ったが、グループとしてまとめた意見とは重みが違うため、本番では投票対象からはずすこととした。

1回目の話し合いでは、最初の話し合いであることから、手法に慣れるという意味も込めて、10

グループを3つに分けて、それぞれで話し合いの結果を発表し、「まとめ」に対して投票を行った。第2回、第3回の話し合いについては、発表は行わず、参加者全員で投票を行った。第4回の話し合いでは、参加者全員の前でグループごとに発表し、投票を行った。投票対象となる「まとめ」については同じような内容でも集約せずにそのまま投票し、結果を分析することとなった。

評価できる点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・参加者の力量が高く、話し合いの内容が豊かで、投票の結果の実現可能性が高い点</li> <li>・第1回の話し合いにおいて、この手法に慣れるという意味も兼ねて投票を実施したことから、以降もスムーズに行うことができた点</li> </ul>
改善が必要な点	_____

**■課題解決の方向性**

参加依頼書に添付したアンケート(115ページ参照)では、102人が「テーマに興味があれば、参加する」と回答しており、市民にとって身近な課題や関心の高いテーマに関する調査も行うことが必要かもしれない。

プログラム設計について、今回は、話し合いのテーマが議論の中心となったが、今後は、情報提供者の選定と並行して議論し、具体的な情報提供の内容とすり合わせをしながら設計していくことが望ましい。また、今回はアイデアを出してもらうための話し合いであったため、アイデアの出しやすさに重きがおかれたが、テーマによっては、話し合いの積み重ねをしていくような設計を行うよう、研究が必要だと思われる。

全体の日程については、参加者の負担を考えると、2日を越える日程は困難であると考えられる。参加依頼書に添付したアンケート(115ページ参照)では、「日程が合えば、参加する」が97人いる一方で、78人が「1日のみだったら参加したいと思う」と回答しており、さらに不参加の理由でもっとも多かったのは年齢や健康上の理由であった。

**2. 運営について**

パートナーシップ協定、運営組織、スタッフ、協力者、スケジュール、費用についても、良好な結果であった。まちづくりディスカッションは、三鷹青年会議所と三鷹市とのパートナーシップ協定にもとづき、三鷹青年会議所のメンバー、市民、三鷹市職員による実行委員会が企画・運営したが、多様なメンバー構成により公平・中立な立場で実施することができた。一方で一部実行委員に負担が集中したことは今後改善すべき課題である。

**(1) パートナーシップ協定**

まちづくりディスカッションは、2006年5月に三鷹青年会議所と三鷹市とがパートナーシップ協定を締結し、協働で開催したものである。

パートナーシップ協定において、両者の役割と責務を定めたが、三鷹青年会議所の役割は、①実行委員会の設置及び運営、②広報活動、③報告書の作成、④個人情報保護、⑤経費負担とし、三鷹市の役割は、①実行委員会への参加、②広報活動、③参加市民のリストの抽出、④情報提供、⑤場所の提供、⑥関係団体との調整、⑦経費負担、⑧報告書の検討とした。

今回のまちづくりディスカッションでは、パートナーシップ協定の締結によって、お互いの役割・責務を明確にすることができたことは、評価できる。

評価できる点	・パートナーシップ協定により、三鷹青年会議所と三鷹市の役割・責務を明確にした点
改善が必要な点	_____

(2) 運営組織、スタッフ、協力者

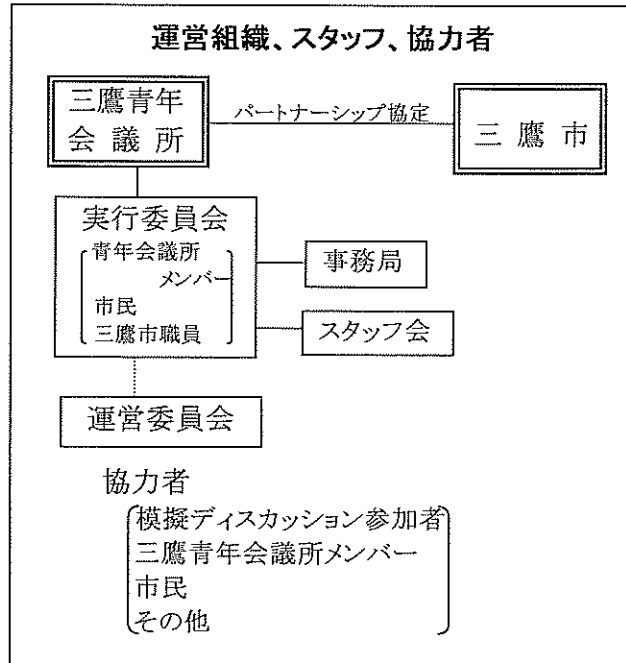
実行委員会がさまざまな立場の委員で構成され、対等で活発な議論をもとに決定・承認を行っていったことは、公平・中立性の見地から評価できることと思われる。

また、記録の作成・整理、情報提供、連絡・調整および市民向け窓口として、市民協働センター内に事務局を設置し、市民、三鷹青年会議所、市民協働センター職員が担当した。それとともに、課題の検討を行うため実行委員によるスタッフ会議を開催した。しかしながら、無償にもかかわらず、一部の実行委員に事務の負担が偏ったことも否めない。実行委員会は決定機関であるため人数を限定せざるを得なかったが、できるかぎり多くの人に関心をもってもらいたいとの思いから、サポート機関として運営委員会を設置すること、また実行委員会を自由に傍聴できることを決めた。なお、運営委員は、スタッフとして、まちづくりディスカッション当日などにおいて、運営に関わった。

事前準備は6か月前から、実行委員による約30回の打ち合わせ、本番前にスタッフを中心とした5回にわたる内部プレディスカッションや模擬ディスカッションを経て本番を迎えた。全く経験のない実行委員や運営委員によって、開催までに参加者の立場で考え運営の準備が行われた。実行委員会が互いの知恵を出し合い、話し合いの積み重ねを行うためには多く時間を必要とした。その際、メーリングリストによる通知や情報交換は、情報共有や会議時間の短縮に効果があった。

まちづくりディスカッション当日は、実行委員、運営委員その他のスタッフは、参加者に気持ちよく過ごしてもらうため、「おもてなしの心」で運営するよう努めた。

なお、2006年6月24日(土)に実施された模擬ディスカッション(2コマの話し合いを実施)の参加者(三鷹青年会議所の関係者8人、市民の紹介3人、運営委員2人、三鷹市職員2人)は、協力者として、まちづくりディスカッションの実施に向けた問題点の指摘や改善の方向性のアドバイスを行った。特に、まちづくりディスカッションの趣旨や意義を参加者にわかりやすく説明すること、話し合いの結果をどのように扱うのかというメッセージが大切であることなどについて指摘を受けたことは、大変有意義であった。



評価できる点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実行委員会が市民の立場と行政の立場とを共有できた点</li> <li>・スタッフ、協力者に幅広い参加を得られた点</li> </ul>
改善が必要な点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・無報酬であるにもかかわらず、一部の実行委員に事務の負担が偏った点</li> </ul>

(3) スケジュール

今回のまちづくりディスカッションの事前準備は6か月前から開始した。ポスター・チラシの作成および配布に2か月、無作為抽出に2か月、郵送する印刷物の作成から発送までに2か月、実行委員会内部の意見調整に5か月間の時間が必要であった。以上を考慮すると6か月の準備期間は妥当な期間と評価できる。

評価できる点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・初回であり綿密な準備期間が取れた点</li> </ul>
改善が必要な点	_____

#### (4) 費用

これまでの市民参加では、そのほとんどが無償であったが、まちづくりディスカッションでは、参加者に2日間で6,000円の謝礼を支払った。(謝礼金の総額約30万円)

そのほか、1,000人に参加依頼書等を送るための郵送料約20万円、コピー料約30万円、無作為抽出するためのシステム開発委託料30万円、ポスター・チラシ印刷代10万円、掲示用模造紙等消耗品20万円、参加者の昼食代等賄費10万円、合わせて約150万円を費やした(なお、システム開発委託料については、今後費用がかからない見込みである)。

今回のまちづくりディスカッションでは、スタッフは無報酬で役割を担っており、昼食代も自弁であったことから、今回の経費は最低金額であったと思われる。

評価できる点	・今回は、最低の費用で実施することができた点
改善が必要な点	・中心となるスタッフは準備のため長時間、無報酬で活動しなければならなかった点

#### ■課題解決の方向性

この手法は、すべてが初めて経験することばかりであったので、スタッフの役割分担を細かく決めることができなかった。そのため、一部の実行委員に事務の負担の偏りがみられた。仮に、今回の取り組みと同規模の内容であれば、実行委員の役割分担を細かく決め、企画・運営を検討する担当者は8~12人程度、ディスカッション当日の協力者は実行委員会とは別に30人程度とするのが望ましいと思われる。

まちづくりディスカッションは、三鷹青年会議所のメンバー、市民、三鷹市職員で構成された実行委員会により企画・運営がなされ、スタッフの多様性が公平・中立性を担保する重要な条件となり、メンバー間の交流も進むなど、非常に有効に機能した。一方で「実行委員会方式」においては、その運営の方法によっては、ボランティアで関わる市民と、仕事として関わる行政職員の立場に相違が生じ、実行委員会の運営が困難になることも想定される。

スタッフは無報酬であったのにも関わらず、一部のスタッフに事務が偏ったため、負担が大きくなった。したがって、中心となるスタッフへの謝礼の支払い(有償ボランティア)や、事務局の充実を実現する必要がある。また、昼食代も自弁であったことから、今後は、開催日当日の昼食代程度は必要経費とすることが望ましい。

### 3. 参加者について

今回の新しい試みの特徴は、「無作為抽出」による市民参加と「参加者への謝礼」の2点であるが、現実的には、さらに「当日人が集まるかどうか」という課題が加わる。したがって、この3点を中心に検証と評価を行う。なお、後述するように参加者アンケートから、この新しい市民参加の手法は、参加者に概ね好意的に評価されたといえる。

#### (1) 無作為抽出方式の人選

まちづくりディスカッション終了後の参加者アンケート項目の5(128ページ参照)を具体的に見ると、無作為抽出の方法については、90%が「無作為抽出の方法はよいと思う」と回答があった。同アンケートの自由回答欄(133ページ参照)においても、「無関心な人にも関心を持ってもらえる」「より多くの人が参加するという意味で良い」「市民の声を出せるチャンスを与えてほしいから」という支持の声がある。さらに「手あげアンケート」(127ページ参照)においても、今後、仮に今回の参加者が参加対象にならなくても、無作為抽出によるまちづくりディスカッションを開催したほうが良いとの回答が100%であった。

従来からの公募型では、元気で意見を持った市民が参加する一方で、普段声を出さない市民の意見を反映することが難しいと思われる。無作為抽出方式は普段声を出さない市民にも参加の機会を提供し、積極的に市政に声を届けようという方式であることから、大枠ではあるが、大勢の意見を求めることができるといえる。当日参加者からは「従来の公募型と組み合わせたら」、という声も複数あり、参加者は今後の市民参加の方法について複数の選択肢まで提案している点なども含めて評価できる。

また、参加者の男女比率、年齢や住所が属する地区の構成について、三鷹市における構成と同様の傾向を示していることも注目に値する。その中でも特に年齢構成については、実行委員会では当初相当の偏りが出ると考えていたが、かなりバランスが取れたものとなったことは驚きであった。

(三鷹市住民、参加依頼書送付者、参加者の男女比率、年齢、住所が属する地区については、138～140 ページ参照)

評価できる点	・無作為抽出による参加者決定方法について、参加者からの支持を得られた点 ・参加者の年齢構成等のバランスが良好であった点
改善が必要な点	_____

## (2) 参加者への謝礼

参加者への謝礼については、参加者アンケートの自由回答欄(132ページ参照)において、「どちらでもよい」という意見がある一方、「あったほうが責任を感じてよい」「2日間という時間の拘束に対して小額でも」「謝礼があるから参加してみようと思う若い人もいると思う」などの肯定的な意見があり、同アンケート項目の4(128ページ参照)において、「謝礼はあったほうが良いと思う」が68.8%を占めた。

この手法における謝礼の意味は、①本来は仕事に行く時間を割いて参加する市民など、さまざまな条件の人に参加してもらおうという点、②結果に対する責任を負うという点にあった。

協働のまちづくり、という構図の中で無料のボランティア活動とともに有償による市民参加というかたちを提示できたことは評価できる。

評価できる点	・有償による市民参加というかたちを提示できた点
改善が必要な点	_____

## (3) 参加者人数

「いったい何人の参加者が声を上げてくれるのか」は、市民の声が上がるまで皆目見当がつかなかった。呼びかけに対して何人の参加者があるかについては、今後も課題となる。謝礼の6,000円は、謝礼としては小額であろうし、参加記念品であるジブリ美術館の招待券の効用もあったと思われるが、結果として52人(2日目は51人)の市民が参加し、提案を出すことができたことは、この新たな市民参加の成果として評価できる。また、参加依頼書の送付を受けた市民のうち225人が参加しない(できない)ものの、同封のアンケートに対する回答があった。同アンケート項目の1(128ページ参照)によると、「面白そうだった」と48.4%、アンケート項目の3では「テーマに興味があれば、参加する。」が34.3%、「日程が合えば参加する。」が32.7%あり、市民のまちづくりディスカッションに対する関心が高く、テーマや日程に工夫をすれば、さらに参加者が増加することも期待できる。

実行委員会では、思いがけず多数の市民から参加の承諾を得たことに、三鷹市民のまちづくりへの関心の高さを感じるとともに、まちづくりディスカッションを成功させる責任を重く感じた。

評価できる点	・予想以上の参加承諾者を得た点 ・市民のまちづくりディスカッションに対する関心が高い点
改善が必要な点	_____

#### (4) 参加者の反応

1日目の冒頭に行った「旗あげアンケート」(125ページ参照)では、参加のお願い(参加依頼書)を受け取ったときに、「進んで参加しよう」と思った参加者は42.3%であったが、2日目の終了時に行った参加者アンケートの項目1(128ページ参照)において、「大変満足」「満足」で全体の76.3%を占め、同じく「手あげアンケート」(127ページ参照)では、「参加して楽しかった」という回答が90%、「再度参加依頼が来たら参加する」という回答が82%であったことから、まちづくりディスカッションに対する参加者の満足度が高いといえる。

また、参加者アンケートにおいて、「市民としての意識を持つきっかけになった」「市民が話し合う場をもっとたくさん設(けるべき)」(135ページの26番・22番参照)などの意見が多数寄せられ、自分たちのまちは自分たちがつくるという参加意識が高まったといえる。

参加者が満足感をもってまちづくりディスカッションに参加し、また、参加意識が高まることから、今後とも継続して、まちづくりディスカッションを効果的に実施することが可能であることが明らかになった。

評価できる点	・参加者の高い満足度が得られた点 ・自分たちのまちは自分たちがつくるという参加意識が高まった点
改善が必要な点	_____

#### ■課題解決の方向性

よりよいまちを目指し、継続的に市民の声を市政に反映させ、良好な循環を生み続けるためには、一連の流れ～テーマ設定、設計(全体プログラムや各話し合いの内容)、無作為抽出、参加依頼書、参加、情報提供、話し合い、意見のまとめ、提案、検討、施策への反映、成果～という連鎖の輪を具体的にイメージして考えることが大切である。

先にも述べたように、この取り組みによる市民満足度は高いことが明らかになったが、より深い満足度は市民がまとめた提案がきちんと施策に反映され、まちが実際によくなった、という成果が実感されることにより得られる。もちろん、三鷹市の取組状況など、そこに至るまでの継続的な情報発信も必須である。まちづくりディスカッションにおいて参加者が話し合いを重ねて得られた成果を三鷹市に提案してから施策に反映されるまでの過程を関係者と共有することにより、参加者は、市民として「自分たちのまち」を実感すると思われる。

そのために、三鷹市は、まちづくりディスカッションによる市民からの提案を真摯に受け止め、検討過程における情報提供も行いながら、施策に反映させることが必要である。

このようにして得られる参加者の深い満足感と、そして「自分たちのまち」をさまざまな視点から見つめ直すためのテーマ設定が相まって、次回のまちづくりディスカッション開催への期待となると考えられる。

#### 4. 広報について

広報活動については、概ね評価できると思われる。広報は、ホームページの開設、チラシ・ポスターの配布、メディアへの対応の3つの手法で行い、その成果は以下のとおりである。

メディアの反応	新聞7紙11回掲載、テレビ・ラジオ5局5回放送、市報(広報みたか)4回(約84,000部)、市民協働センターニュースレター4回(約2,000部)
問い合わせ	視察5件、電話問い合わせ約60件
両日の来場者(累計)	見学者30人(他市役所2人、三鷹市議会議員3人、研究者6人、その他19人)、報道6社

##### (1) ホームページ

2005年6月に三鷹市は2005年WTA(世界テレポータル連合)のインテリジェント・コミュニティ・オブ・ザ・イヤーに選ばれたこともあり、実行委員会では市民協働センターのサイトでの情報提供はもちろんのこと、当初から専用ホームページを開設するよう意見が出ており、積極的に情報公開を行うことができた。

専用ホームページの開設に当たっては、スピーディに開設できる、更新し易い、費用がかからない、という3点がポイントとなった。これらの条件を満たすシステムとして、今回は無料のFC2ブログ(<http://blog.fc2.com/>)を採用することにした。使用できる容量も多く、機能の拡張性も高いことから、今後の使用にも十分耐えられるシステムであると思われる。

評価できる点	<ul style="list-style-type: none"> <li>市民協働センターのホームページで情報提供だけでなく、当初から専用のホームページを開設した点</li> <li>ディスカッション両日の状況、参加者の感想などを速報としてアップした点</li> </ul>
改善が必要な点	<ul style="list-style-type: none"> <li>アクセス解析を設置しなかった点</li> <li>更新頻度が少なかった点</li> </ul>

##### (2) チラシ・ポスター

チラシは合計18,000枚印刷し、参加依頼書に同封するほか、市内の保育園、小学校、中学校に通う子ども全員に配布、市内の公共施設を始め郵便局や市民協働センター周辺の商店など計60か所に設置した。印刷は当初、費用の問題からモノクロを想定していたが、参加依頼書と同封する他の印刷物がモノクロのためチラシはカラーで訴求力を出したいとの声もあり、複数の印刷所を検討した結果、インターネットで見つけた印刷通販プリントパックというサービスが、その時点で最も安く紙もしっかりとしたものだったので、カラーで印刷することにした。

また、A3に拡大コピーしたものをポスターとし、三鷹駅前の市政掲示板を始め町内掲示板、公共施設など計200か所に掲示した。

評価できる点	<ul style="list-style-type: none"> <li>カラーチラシは参加者にも好評で、チラシを見て参加を決めた人もいた点</li> <li>保育園、小学校、中学校の全生徒に配布しただけでなく、各所にチラシを置いた点(計60か所)</li> <li>人目につきやすいところにポスターを掲示した点(計200か所)</li> </ul>
改善が必要な点	<ul style="list-style-type: none"> <li>協働センター周辺の商店だけでなく、商工会と連携し市内の全商店に協力を依頼しても良かった</li> </ul>



### (3) メディア対応

プレスリリースを行った先は14か所、そのうち記事や放映などの反応があったのは、朝日新聞、読売新聞、毎日新聞、産経新聞、東京新聞、日本経済新聞、都西タイムス、NHK、東京MXテレビ、むさしのFM、武蔵野三鷹ケーブルテレビである。このほか、市報や市民協働センターのニュースレターにも掲載している。

記者の反応は好評を得ており、その理由として実行委員会の様子だけでなく当日も取材を可能にした点が挙げられる。経済紙である日本経済新聞にも2回、しかもある程度大きい枠で掲載されたことは、メディアの関心の高さが伺われる。

評価できる点	・基本的にオープンとし、取材をOKにした点 ・参加依頼書に取材があることを明記し、参加者に周知していた点
改善が必要な点	・三鷹市側のメディア対応と専用ホームページの連携が弱かった点

#### ■課題解決の方向性

今回は初回ということもあり、プレスの反応もよく記事や放送を目にすることが多かった。しかし、今後回数を重ねていくと話題性が低くなりプレスの反応も鈍くなるが、市民には浸透し関心は高くなっていくと思われる。

プラーヌクスツェレの特徴のひとつに結果を広く公表するということがあるが、これはメディアとの連携が課題となる。今回は主に三鷹市の広報課がメディアへの対応を行ったが、今後は実行委員会としてもメディアの各担当者を把握し協力関係を築き、その状況を把握しながら広報活動を行うことが必要になるとと思われる。

市民に対しては、今回の結果と今後の周知という課題がある。今回の結果は、参加した市民はもとより参加したくても参加できなかった市民もまちづくりディスカッションの結果には関心が高く、コストがかからないホームページを活用し途中経過や市政への反映の状況などを随時公開していくことが必要である。

また、今後の周知に関しては、市内の他機関との連携が必要である。例えば、社会教育会館や三鷹ネットワーク大学において市民向けの報告会やセミナーを開催することにより、まちづくりディスカッションの普及啓発を行ったり、商工会に市内商店でのポスター掲載を依頼したりすることが可能である。市民との協働だけではなく、他機関との協働も視野に入れて広報活動を展開するとより効果的になるとと思われる。

## 5. まちづくりディスカッション開催後の取り組み

ここでは、まちづくりディスカッション開催後の取り組みとして、中間報告会、報告書の作成、事後のフォローについて述べる。なお、中間報告会や報告書の作成については、概ね評価できる内容となった。パートナーシップ協定により、三鷹青年会議所(実行委員会)の役割が報告書の提出にあることから、事後のフォローについては、協働センターで市民に対する情報提供等をするに止まっている。

### (1) 中間報告会

まちづくりディスカッション開催からちょうど1か月後の9月27日(水)、市民提案として提出する報告書の方向性を参加者に確認してもらう機会として中間報告会を開催した(中間報告会の参加者52人中18人出席)。中間報告会では、話し合いの結果を分析してまとめたものを中間報告書として参加者に提示した。

実行委員会では、中間報告会までの間に、まちづくりディスカッションで行われた話し合いおよび投票の結果を分析したが、客観性を重視するため、複数の方法によって分析を行うことにした。(15ページ参照)

投票をしながら、さらにそれを分析することが適当なのか、という議論も成り立つが、今回は1日半でまちづくりディスカッションを行うという時間的制約の中で、投票の対象となる各グループの「まとめ」に同様の内容のものがあったとしても、集約することなく投票に付すことはやむを得ないことだと考えられる。分析方法については今後も研究が必要かもしれないが、分析結果の報告とともに、分析の方法とルールを明確にしておくことが大切であると考え。中間報告会では、この点について参加者に説明できたことも評価できる点である。

また、実行委員会の中では、三鷹市に取り組みを求める具体的な提案例を実行委員会で補足して示すべきではないか、という議論もあったが、まちづくりディスカッションでの話し合い・投票の結果に実行委員会の作為が入る結果となりかねないため、あくまでも当日の話し合いの範囲内で分析することとした。なお、分析の結果を中間報告会で報告し、質疑を行ったうえで報告書の方向性が参加者に了承されたこと(当日出席できないまちづくりディスカッションの参加者には中間報告書を送付した。)により、まちづくりディスカッション当日の議論や投票を補うことができたことと評価できる。

中間報告会の後で懇親会を開催した(懇親会は、参加者からの提案がきっかけで開催することとなった。)が、そこでは、参加者同士の交流、参加者とスタッフとの交流を持つことができ、楽しいひと時を過ごすとともに、まちづくりに関する関心の高さや思いを直接聞くことができた。あらためて参加者と直接交流する機会を持つことがいかに大切であるかを実感した。

評価できる点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・話し合いの結果を分析し、その方向性を中間報告会で参加者に確認したことで、分析の客観性が高まった点</li> <li>・中間報告会後の懇親会、参加者と直接交流が持てたことで、まちづくりに関する関心の高さや思いを直接聞くことができた点</li> </ul>
改善が必要な点	_____

## (2) 報告書

まちづくりディスカッションの報告書の構成については、実行委員会において、早い段階から検討されていたが、まちづくりディスカッションの目的は、そこで行われた話し合いの結果を三鷹市に提案するとともに、まちづくりディスカッションという新たな市民参加の効果と手法について検証・評価することにあつたため、報告書についても「話し合いの結果」と「手法の効果の検証・評価」を含めて編集することとした。

「効果と手法の検証・評価」は、実行委員が、それぞれ所管していた部分を中心にまとめることとした。なお、中間報告会において、①参加者アンケートの内容等について、手法の効果の検証で活かしてもらいたい、②まとめの意見には入っていないが、ユニークな意見等で具体的に活かしていけるものもあるのではないか、という意見にしたがって、報告書を通してアンケート等の資料を使って客観的に分析するとともに、資料を充実させることとした。

評価できる点	・アンケート等の資料を使って客観的な分析に努めた点
改善が必要な点	_____

## (3) 事後のフォロー

中間報告会においても質問があつたが、参加者は、本報告書を提出した後の三鷹市の対応について、当然大きな関心を持っている。今回はパートナーシップ協定により実行委員会の使命が報告書の提出にある(実行委員会は、2007年2月末日をもって解散する)ことから、実行委員会が事後のフォロー(見守り)をする組織になることはできないが、市民協働センターにおいて、引き続き市民に対する情報提供を行うこととした。

評価できる点	・情報提供については、市民協働センターで行うこととした点
改善が必要な点	・今回は、フォローの仕組み・組織を持っていない点

### ■課題解決の方向性

今回のまちづくりディスカッションにおいては、話し合いと投票の結果を分析したが、まちづくりディスカッションにおける投票の結果を結論とするためには、徹底的な話し合いを経て、投票を行う必要が生じる。そのためには多くの時間を要することになり、まちづくりディスカッションに参加しにくくなるのが心配される。それを回避するには、分析を行う必要があるが、分析の手法については、今後検討を行う必要がある。今回明らかになったことは、各グループの「まとめ」が、必ずしも1つのことを提案するものではなくて、1つの文章で複数の提案をすることがあるため、単純に得票数を合計するだけでは、十分その意図が反映されないのではないか、ということである。このことを防止するには、各グループの「まとめ」の記入欄に、それぞれ1つの提案のみを記入すること、といったルールを明確にすることが重要である。

また、報告書を三鷹市に提出した後のフォロー（見守り）を誰が行うかについて、あらかじめ三鷹市と協議をしておくことも必要であると考え。ただし、フォローのみを行う団体が有り得るかという問題があるので、可能かどうかは、それぞれの課題に応じて検討するしかない。行政では、情報提供以上のフォローはできないので、可能であれば市民団体などが常設の事務局を設けてフォローすることが望ましい。

なお、今後まちづくりディスカッションの取り組みを他の団体が主催して行う場合においては、今回の参加者の中でスタッフとして関わりたいという希望があれば、スタッフとして協力してもらうことも、この活動を継続していくには必要なことだと思われる。



●話し合いの各種道具

●参加者の公開抽選会会場



## 第4章 展望

### 1. まちづくりディスカッションの展望

2006年8月26日・27日に開催した「みたかまちづくりディスカッション2006」は、想像を超える参加同意者数があったことから抽選を行い、52人の参加者で実施された。驚くべきことは、参加者が、行政に求めることと地域や自分たちが行うことを自らが区別し、複眼的な視点から議論を展開し、意見をまとめていったことである。「市民自治による協働のまちづくり」実現にこの取り組みの有効性が実証されたことから、今後も継続的に実施していく環境づくりが急務と考える。

完全無作為抽出による「まちづくりディスカッション」の今後の可能性については幅広く期待できるが、今回は「子どもの安全安心」をテーマで実施した。

第3章 まちづくりディスカッションの検証と評価(25ページ)でも有るように、この取り組み手法は無作為抽出にもかかわらず、質の高い提案をまとめることが実証された。このことから多様な行政課題をテーマに汎用していけるだろう。

同一テーマで多くの地域(住区別等)で開催するなど、市民の声を広く拾うことを目的に様々なかたちの応用が考えられる。さらにテーマをもっと狭くして、明確な方向性が導き出せるようなパターンで開催も考えていくべきである。

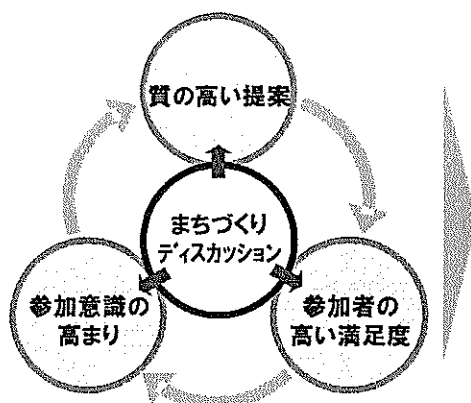
1,000通の参加依頼書に対し87人の参加承諾を得た上に参加者の満足度が高く、再度参加してもよいと答えた市民が82%と高いことから継続して行うことが可能である。そして参加者は「自分たちのまちは自分たちが作る」という参加意識が高まったことから、継続的に実施することにより、まちづくりに新たな息吹をもたらすことが期待できる。

一方、参加市民の参加意識が高まったことで、その後のまちづくりへの参加機会をどう構築するかが課題となるだろう。

今後は、市の基本計画の策定や改定作業などでこの手法を組み入れるなどの可能性を検討するとともに、「自分たちのまちの課題は自分たちで考えていく」という地域自治の原則から、運営機関側でテーマ選定を行うだけでなく、話し合いのテーマを市民から公募にて行う等の方法も検討していく必要がある。また同一テーマで多くの地域(住区別等)で開催するなど、市民の声を広く拾うことを目的に様々なかたちの応用が考えられる。

次に運営機関のあり方に問題が残る。その構成メンバーの多くは無償ボランティアである。しかしこの取り組みは多くの時間と労力を要するものであり、継続性の確保から考えると限界を感じる。公平・

中立な機関であることが前提となるが、有償ボランティアや実施機関への委託契約(委託料有り)などの方策を検討していく必要があるだろう。



#### 今後の可能性

- ・ 同一テーマで同時に多くの地域(住区別等)などで開催する
- ・ 話し合いのテーマを市民から公募等
- ・ 市の基本計画の策定や改定作業などでこの手法を組み入れる
- ・ 継続的に実施できる運営機関の確立
- ・ 参加市民のその後のまちづくり参加機会の創出
- ・ まちづくりディスカッションの位置づけの検討

## II. 今後の取り組みに関する情報提供

実行委員会は、三鷹市へ「みたかまちづくりディスカッション 2006」の報告書を提出した後も、参加者を始め、市民や関係者に対し、みたかまちづくりディスカッションのホームページや市民協働センターのホームページなどにより、その取り組み状況について情報提供を行う。

なお、実行委員会の活動は、2007年2月末日までであり、その後は、市民協働センターを中心に情報提供を行う予定である。

●みたかまちづくりディスカッションのホームページ

<http://181.blog37.fc2.com/>

●三鷹市市民協働センター

ホームページ：<http://www.collabo-mitaka.jp/>

〒181-0013 三鷹市下連雀4-17-23

TEL:0422 (46) 0048

FAX:0422 (46) 0148

開館時間：9:00am-9:30pm

受付時間：9:00am-9:00pm

休館日：火曜日(祝祭日は開館し、直近の平日が休館日となる)



## 参考文献

- 西ドイツにおける都市計画教育と住民参加  
(大村謙二郎、都市計画116、1981年)
- プランungskツェレのメルクマールとその評価  
(篠藤明德、別府大学短期大学部紀要第19号、2000年)
- ドイツの市町村におけるプランungskツェレの実施  
ーメアブッシュ市(都市開発)とノイス市(中心市街地)の事例ー  
(篠藤明德、別府大学紀要第43号、2001年)
- ドイツの市民参加「プランungskツェレ」の進展  
(篠藤明德、日経グローバルNo.12、2004年)
- プランungskツェレー熟慮デモクラシー論の実践的アプローチ  
(後藤潤平、早稲田政治公法研究第76号、2004年)
- 市民の政治学ー討議デモクラシーとは何かー  
(篠原一、岩波書店、2004年)
- 地域社会研究第11号プランungskツェレ特集号  
(秋田清、篠藤明德、ペーター・C・ディーネル、2005年)
- 無作為で選ばれた市民参加「プランungskツェレ」  
ー三鷹の「実験」にみる日本版モデルの可能性ー  
(篠藤明德、日経グローバルNo.61、2006年)

## 編集後記に代えて～スタッフからのメッセージ～

### ● 実行委員のメッセージ

無作為で初めて会う市民の方々が議論をするのは難しいだろうと思っていましたが、想像を超えるレベルの高さに驚かされました。市民の良識を感じました。また、実行委員会皆さんの力量は素晴らしい！今回、行政との協働による一体感も感じる事が出来て大変楽しかったと共に、今後への展望が期待される取り組みであると確信しました。

吉田純夫(三鷹青年会議所／実行委員長)

公平・公正な運営が出来て良かったと思います。市民のみなさん本当にありがとうございました。

高橋和継(三鷹青年会議所／実行副委員長)

ディスカッションは20名以上で必ず実行できるよう、基本設計と関係者の合意形成に注力しました。

河瀬謙一(三鷹 SOHO 倶楽部／実行副委員長)

今回の手法は、参加者のみなさんにとっても初めてなら、私たち実行委員会にとっても初めてのことばかり。スタッフ一同、どうしたら気持ちよく参加していただけるか、精一杯考えました。反省点は多々ありますが、参加者のみなさまとの出会いは、私たちにとって大きな宝物となりました。

高橋由紀子(市民協働センター企画運営委員／実行副委員長／事務局長)

初めての顔合わせは役割分担で時間を取られがちですが、ジャンケンで決めたので平等間を感じていただけたようです。とにかく「自立性」と「公共性」レベルが高い皆さんばかりで驚きました。このような手法を通して、「能動性」を発揮していきたいという声もありました。

正満たつる子(市民協働センター企画運営委員／実行副委員長)

参加者の皆さんが、話し合いの回を重ねるたびに生き生きとしてきたのに感動いたしました。今回ご参加の皆さんの意識が、今後、家庭に地域に波及していく、繋がっていくボランティア活動の意義が感じられました。

埴村貴志(三鷹青年会議所)

無作為抽出の有効性と可能性を感じました。今後の発展を希望しています。

宍戸隆介(三鷹青年会議所)

清原市長始めとする三鷹市の皆様、今回の事業に少しでも関わって頂いた全ての皆様本当に感謝しております。

島田栄造(三鷹青年会議所)

無作為抽出で52名もの方々が参加したこと自体にまず感動しました。初めて会った人同士が「子どもの安全安心」について語り合うなんて素敵ですよね。2日目が終わった時の参加者・スタッフなど関わった全ての人の顔はとても素晴らしかったです。

村井 亨(三鷹青年会議所)

この取り組みに参加できて良かったと思います。いろいろな場所で使える手法だと感じました。

小林秀紀(三鷹青年会議所)



ディスカッションに参加してくれた一般市民の方々や設営してくれたスタッフの方々などなど三鷹のこれまでしてきた市民の活動の土壌の素晴らしさと三鷹市民の意識の高さにただただ脱帽です。ありがとうございました。

鈴木知康(三鷹青年会議所)

まず、実行委員の皆様、お疲れさまでした。皆様の熱意と情熱が「みたかまちづくりディスカッション2006」成功の要因だったのではないのでしょうか。

私はそう感じました。もちろん、市民参加者の意識は想像以上に高いものでした。今回、このような貴重な体験をさせていただき、感謝しております。

ありがとうございました。

中山恭延(三鷹青年会議所)

市民の皆さんの声を行政に届けるシステムとして、非常に公平・公正なものだと改めて確信しました。今後も是非、市政運営に役立てていただければ幸いです。

稲沢明仁(三鷹青年会議所)

結果・検証が重要ではありますが、この事業の過程に携われたことが非常によい経験になりました。広めていきたいですね。

平林 亮(三鷹青年会議所/事務局次長)

「みたかまちづくりディスカッション 2006」は、本当に楽しい経験でした。楽しさを身体一杯に感じられることは、そんなに多いことではありません。「まちづくり」っていうのは、そんな風に感じられることが一番大切なのではないのでしょうか。そして、これはこのまちの大事な財産になると思います。

宮川 齊(市民協働センター企画運営委員)

今回の試みが報告書の提出で終わるのではなく、市政に反映されることを期待します。また、全国に広がっていくことにも期待します。

斉藤憲仁(三鷹 SOHO 倶楽部)

今回の「みたかまちづくりディスカッション2006」によって、三鷹市民の参加意識が高いことがより一層理解することができました。

参加していただきました市民の皆さん、実行委員会の皆さん、ご協力してくださいましたすべての皆さんにお礼申し上げます。ありがとうございました。

清水富美夫(三鷹市)

今回のプロジェクトは、当日の成果とともに、実施のプロセスにも大きな意義があったと思います。青年会議所の皆さん、市民の皆さん、そして行政職員が一体となって、検討開始から報告書の提出まで、まさに協働で取り組みました。

いくつかの課題も明らかになりましたが、この成果をぜひとも今後につなげたいと思います。

伊藤幸寛(三鷹市)

すばらしい経験をさせていただきました。参加者の皆さんの話し合いがとても巧く、大変勉強になりました。

宮崎治(三鷹市)

新しい取り組みに関わることができましたことを心から感謝いたします。

伊藤千恵子(三鷹市/事務局)

## ●運営委員のメッセージ

それにしても、今回の試みは本当に意義深く、価値の高いものでした。今回の良かった点、改善すべき点をどんどん放り込んでバージョンアップさせていくべきだと思います。みたかは、「実験」に対して非常に前向きな思考で取組んでいくのが、最大の強みであると思います。

米川充(市民協働センター企画運営委員)

おかげ様で得がたい経験をさせていただきました。今回のことは三鷹に貴重な財産を積み上げることの出来た、新しい歴史の1ページだったと思います。感動感激の私は、二日間現場中継をいたしました。お時間のある方はちょっと覗いて見ていただけたら嬉しいです。

鈴木千賀子(市民協働センター企画運営委員)

当日は、少し反省もしましたが、無事に終わることができて感動しました。参加者の視線が「“あの日の話し合い”を三鷹市は本当にしっかり受け止めるのか」という所にあることを自覚しなければならぬと思いました。

川口真生(三鷹市)

いろいろと考えて準備をしていたのですが、参加された市民のみなさまや三鷹青年会議所を始めスタッフの方々のご活躍により何事もなく無事に終わり良かったです。参加者のお見送りをしていた際の市民のみなさまの充実した笑顔が印象的でした。

田口武(三鷹市)

# みたかまちづくりディスカッション2006参加者

(敬称略)

「みたかまちづくりディスカッション2006」にご参加およびご協力ありがとうございました。皆様の真剣な議論により、この取り組みの有効性が実証され、また報告書を完成することができました。話し合いの結果(報告書)を三鷹市に提案し、施策への反映を目指すと共に、この新しい市民参加手法を今後もいろいろなテーマで実施させるよう働きかけてまいります。

本当に心から感謝を申し上げます。

相原 健一  
東 久実  
雨宮 裕子  
新井美津枝  
安藤 敬子  
飯田 薫子  
池田 宜子  
石井 昭  
石丸 昭二  
井上 雅子  
上野 優  
内澤 窓哉  
浦山 絵里  
門脇 敏光  
倉橋 成実

黒沢 園子  
小西 敏  
篠田 絵里  
柴田 英男  
柴田 弘道  
高橋 睦  
寺田 勤  
長澤登美子  
中野 暢義  
丹羽 俊夫  
萩原 百合  
馬部久美子  
林田 芳子  
古川 博史  
古舘 靖枝

本多由紀子  
増田 光男  
間瀬 裕子  
三谷 睦子  
三平 喜信  
宮下 正樹  
宮村 連理  
安田 好宏  
寄川 志朗  
若林 卓美

他 12 名

また、様々な形で「みたかまちづくりディスカッション2006」にご協力くださいました、次の方々にも心から感謝を申し上げます。

まちづくりディスカッション参加依頼書に同封されたアンケートを返信された皆さん  
模擬ディスカッション参加者の皆さん  
地域安全マップ作成の橋本博子さん、橋本理恵さん  
サンケイリビング新聞記者の向山奈央子さん  
篠藤明德別府大学教授  
青年会議所関係者の皆さん  
三鷹警察署藤野生活安全課長  
三鷹市福島安全安心課長  
三鷹市教育委員会竹内総務課長  
三鷹市立東台小学校大沼校長  
その他、まちづくりディスカッションを支えてくださいましたすべての皆さん

## みたかまちづくりディスカッション2006実施報告書 ～子どもの安全安心をテーマに～

---

2006年12月発行

監 修 三鷹青年会議所

編 集 みたかまちづくりディスカッション2006実行委員会

発行所 三鷹市市民協働センター  
〒181-0013 東京都三鷹市下連雀 4-17-23  
Tel:0422-46-0048  
Fax:0422-46-0148  
ホームページ: <http://www.collabo-mitaka.jp/>  
メールアドレス: [kyoudou@collabo-mitaka.jp](mailto:kyoudou@collabo-mitaka.jp)

---

- ・ 本書の一部または全部についての著作権は、三鷹青年会議所、三鷹市および実行委員会にあります。承諾を得ずに無断で複写・複製することは、法律で禁じられています。
- ・ 本書の内容について、ご質問やご意見がございましたら、上記の発行所までお問い合わせください。